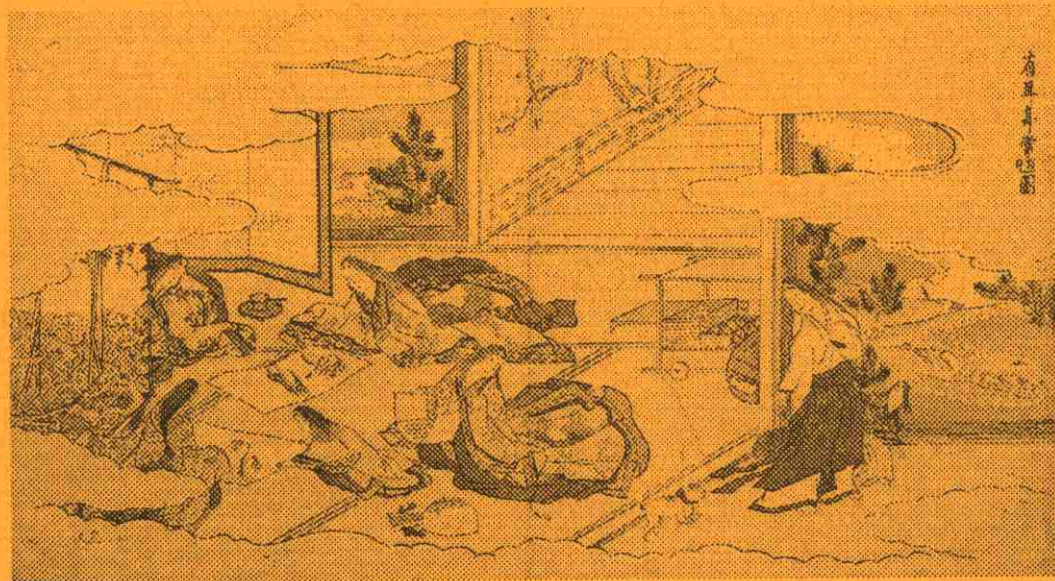


中央大学所蔵
狂歌関係書解題目録



中央大学図書館

中央大学所蔵狂歌関係書解題目録

中央大学図書館

目次

家津と	1
狂歌 <small>類題</small> 続家津と	2
万載狂歌集	3
故混馬鹿集 乾	4
徳和歌後万載集	6
狂歌 後集	8
狂歌 <small>類題</small> 杓子栗	9
狂歌 <small>類題</small> 後杓子栗	10
〔四方の巴流〕	12
堀川次郎百首題狂歌集	13
狂歌新杓子栗 上	14
狂歌画像作者部類	16
狂歌奇人譚 初編	17
狂歌奇人譚 初編・二編・三編	19
狂歌やへかき集	21
狂歌みつのも	22
狂歌三都の賑ひ	23
狂歌梅月集	25
狂歌競鳴集	26
豊の秋	28
六樹園狂歌集	29
狂歌あづさ弓	30
式拾七番魚果狂歌合	31
狂歌あふひ艸	33
狂歌春秋	34
四方 <small>赤良</small> めでた百首夷歌	36
ふじ狂歌百首	37
真顔文集	39
平荷文集	41
狂歌貝杓子	42

狂歌ひとりむし	44
* *	
解説 - 近代の狂歌本を中心に -	47
* *	
翻刻『狂歌貝杓子』・『 ^{狂歌} ひとりむし』	1
『狂歌貝杓子』	2
『 ^{狂歌} ひとりむし』	11

凡 例

- 一、本書は、中央大学図書館（文学部研究室を含む）が所蔵する狂歌本、および狂歌に関連する書籍の解題目録である。ただし、野崎左文に関するものを除いて翻刻本・複製本は除外した。
- 一、まず刊本を年代順に、その次に写本（自筆稿本）を排列した。
- 一、平仮名は現行の字体、漢字は新字体を用いた。
- 一、改行については、「／」で示した。
- 一、版木の摩耗などの理由により判読不能である文字については「□」で示した。
- 一、書誌事項は下記の要領で記述したが、該当事項の備わらない場合は省略した。

書名 外題を優先し、外題が存在しない場合は他の題名を採用した。書名に続けて、刊写の別、版型、巻数を記載し、次行に請求記号と ID 番号を記した。

表紙 表紙の色、模様、大きさを記した。

外題 記載内容と、題簽・直書の別、原・後補の別、記載位置を記した。題簽の場合は、枠の種類、大きさを記した。

構成 全体の構成を丁数をもって記した。

柱刻 柱題・巻数・魚尾・丁付など、柱刻構成要素を記した。

丁付 柱刻に備わらないものについて丁付の内容を記した。

見返 記事を記し、その他特記すべきことを括弧内に示した。

内題 内題下記事も記した。

前付 序・目録等本文の前に備わる記事から題・年記・書名を出現順に記した。

本文 匡郭の種類及び大きさ、界線の有無、半丁行数、無郭のものについて字高等を記した。また本文末の記事もここに記した。

尾題 尾題を記した。

後付 跋題・文末年記・署名を記した。

刊記 全文を翻字した。

広告 広告記事を説明した。

印記 印文を「 」で囲んで記述し、続けて押捺箇所、形状、陰陽の別、朱墨の別、大きさを記した。

識語 記載箇所、記事内容を記した。

備考 上記以外で重要と思われる項目を適宜記した。

一、項目の末尾に執筆担当者を記した。

家津と 刊・半紙本 1 卷 1 冊

911.19/T21(00010429496)



表紙 白茶地に格子と朝顔雲母刷、22.8 × 16.0 糎

外題 題簽「家津と 全」（左肩単郭、15.4 × 2.9 糎）

構成 見返、口絵半丁、序 1 丁半、本文 28 丁、跋半丁、刊記半丁、蔵版目録 2 丁半
（半丁は後表紙見返）

見返 「画像讚／細い目で／ふりさけ／見るハ／ふる里の／象山とやらに／出し／月
かも」（下に貞柳座像あり）

柱刻 「 ○」

丁付 丁裏ノド「家二（～三十二）」

前付 口絵（床の間に象の画幅の図）、序「……／淵田不臧序」

内題 「歳旦 油煙斎貞柳」

本文 無郭無界 10 行、字高 17.5 糎

後付 跋「……／万笈堂桑画誌／ 享保十四己酉歳蘭月朔」

刊記 「大坂雛屋町／撰者 堺屋四良兵衛／享保十四年酉七月／浪華書林 阿波坐衾町 寺田善助／八尾与八郎」

広告 蔵版目録「永昌堂板行書目拔書／（「王常訓」以下 114 点）／御書物御経類古本 売買所 大坂心齋橋通伝馬町 柏原屋左兵衛板」

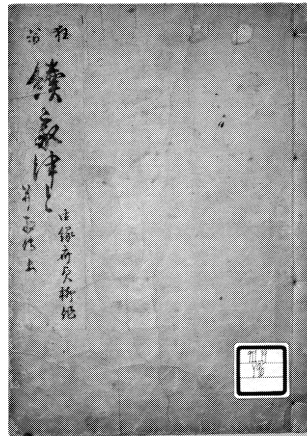
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）、「□□／□印」（口絵、方形陰刻朱印、1.4 × 1.3 糎、難読）

備考 後印本。摺刷不良。

正編、続編ともに好評により長期にわたって印刷刊行された。諸本にさまざまあり、書名や序跋の取り合わせ等複雑な様相を呈する。 (斉藤理香)

狂歌 続家津と 刊・半紙本 1 卷 1 冊

911.19/Y96(00010478667)



表紙 白茶色無地、22.5 × 15.8 糎

外題 題簽「狂歌 続家津と 由縁齋貞柳作」 (左肩無郭、16.5 × 3.3 糎) 并相伝書

構成 序 2 丁、口絵 4 丁、本文 25 丁、「狂歌式」2 丁半、跋半丁、後表紙見返に蔵版目録

柱刻 「初（～三十三）」

前付 口絵（「狂歌二聖」「狂歌六歌仙」の狂歌に取り合わせた絵）、序「……／油煙齋貞柳誌」

本文 無郭無界 10 行、字高 17.3 糎

後付 「狂歌式／……／油煙齋書之」、跋「……／可親軒主人書」

広告 蔵版目録「狂歌誹書目録／（「後撰夷曲集」以下 17 点）」

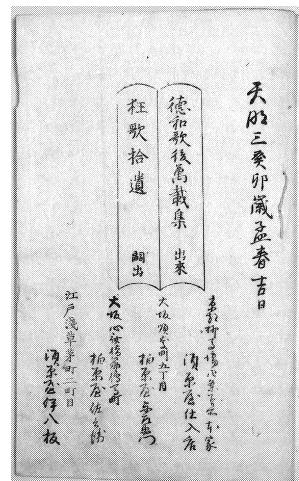
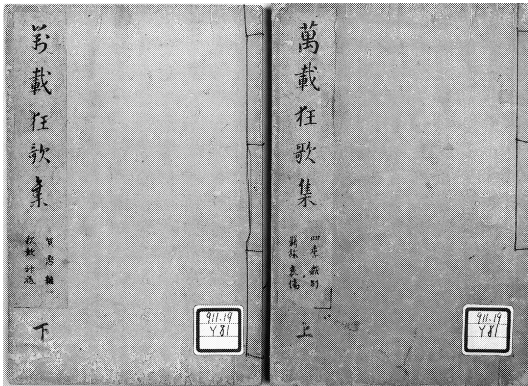
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

備考 後印本。摺刷不良。

（斉藤理香）

万載狂歌集 刊・半紙本 17 卷 2 冊

911.19/Y81(00010480499/00010480507)



表紙 白茶色地、麻の葉に小菊の丸散らし模様型押、22.5 × 15.2 糎

外題 題簽「萬載狂歌集 四季 離別」「萬載狂歌集 賀 恋 雜」(題簽下に「上」「下」墨書あり)

柱刻 「序 ○一(～四)」「序 ○」「 ○一(～四十九)」、「 ○五十(～九十五)」「 ○」

構成 上冊 序4丁、序1丁、本文49丁(春歌上6丁、春歌下6丁、夏歌7丁、秋歌上5丁、秋歌下7丁、冬歌6丁、離別歌2丁、羈旅歌4丁、哀傷歌3丁、賀歌3丁)、下冊 本文46丁(恋歌上6丁、恋歌下7丁、雜歌上9丁、雜歌下11丁、雜體5丁、釈教歌4丁、神祠歌4丁)、跋1丁、後表紙見返に刊記

前付 序「……天明みつのとしはるの日のなが／＼とゑらひ終れるになんありける／朱楽菅江」、「……時天明三年歳次癸卯四方山人等序」

内題 「萬載狂歌集卷第一(～十七)」

本文 無郭無界十行、字高17.0糎

後付 跋「……橘のやちまたかのふる事しかり」

刊記 「天明三癸卯歳孟春吉日／京都柳馬場四条下ル所本家 須原屋仕入店／大坂順慶町五丁目 柏原屋与左衛門／大坂心齋橋筋伝馬町 柏原屋佐兵衛／江戸浅草茅町二丁目 原須屋伊八板」

広告 「徳和歌後萬載集 出来／狂歌拾遺 嗣出」(刊記前)

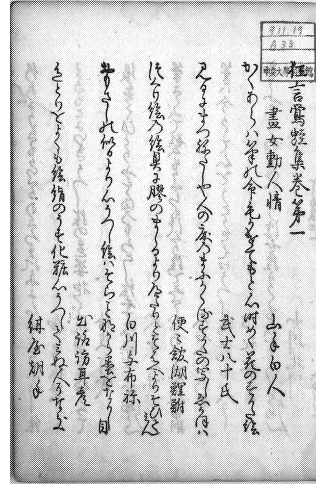
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和45年4月1日寄贈」(見返、矩形陽刻朱印、5.8×4.0糎)、松紋印(見返・各巻首、陽刻緑墨印、1.0×1.5糎)

備考 後印本。初印本と目されている大妻女子大学図書館所蔵本の刊記は「天明三癸卯歳孟春吉日／京都柳馬場四条下ル所本家／須原屋仕入店／大坂心齋橋筋順慶町五丁目／柏原屋佐兵衛／東叡山下池之端仲町／須原屋伊八板」となっている。また、大妻本は賀歌が下冊の首にあるが、中大本は上巻末にある。

(梁喜辰)

故混馬鹿集 乾 刊・半紙本7巻1冊(乾冊のみの零本)

911.19/A33(00010429223)



表紙 錆浅葱色無地、22.6 × 13.1 糎

外題 原題簽「故混馬鹿集 乾」（左肩单郭、15.0 × 3.1 糎）

構成 序3丁、巻一本文9丁、巻二本文8丁、巻三本文11丁、巻四本文9丁半、巻五本文5丁、巻六本文7丁半、巻七本文8丁

丁付（丁裏のど）「をうあ集序一（～三）」、「六タイノ一（～九）」、「春ノ一（～十八）」、「夏ノ一（～九）」、「秋ノ一（～十三）」、「冬の一（～八）」、「をうあ集上一（～五十七）」

前付 序「……天明四年甲辰十二月廿日過尻より逐るゝはかりいそがしき片手にかいあつめ終れはいにしへを忍ふ人定めて今をわらはさらめやもといま口へらす漢江等かあまりのことにたはふるゝもいらさる事の」

内題 「狂言鶯蛙集巻第一（～第七）」

本文 無郭無界約12行、字高17.0 糎

尾題 「狂言鶯蛙集巻上終」

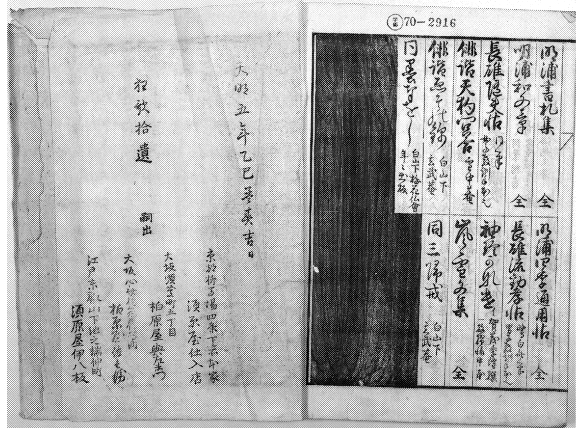
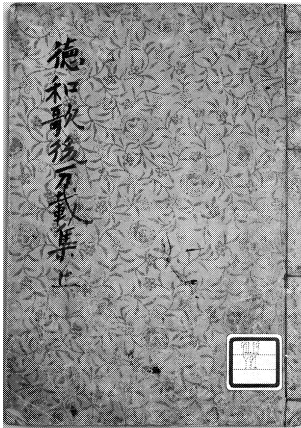
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」 (見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)、松紋印 (巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎)

識語 「鈴木氏」 (後表紙左下)

(吉川東)

徳和歌後万載集 刊・半紙本 15 卷 2 冊

911.19/Y81(00010479798/00010479806)



表紙 象牙色地に千歳緑の桜唐草と鶴の丸散らし (刷)、22.7 × 15.9 糎

外題 題簽欠 (剥離跡あり)、左肩直書「徳和歌後万載集 上 (下)」

内題 「徳和歌後万載集巻第一 (~十五)」

構成 上冊 序 2 丁、序 3 丁、巻一本文 13 丁半、白紙半丁、巻二本文 7 丁半、白紙半丁、巻三本文 12 丁半、巻四本文 7 丁、巻五本文 5 丁、巻六本文 2 丁半、全 53 丁、下冊 巻七本文 4 丁、巻八本文 6 丁、巻九本文 11 丁半、巻十本文 10 丁、巻十一本文 8 丁、巻十二本文 5 丁、巻十三本文 6 丁、巻十四本文 2 丁半、白紙半丁、巻十五本文 4 四丁、跋 1 丁半、白紙半丁、広告 2 丁、後表紙見返に刊記、全 63 丁半

柱刻 上册「序」「〇一（～三）」「一～（四十九）」、下册「又一（～又五十八）」「一（～二）」

前付 序「みろく十年辰のとしきのふとたつたる春のはしめこれをひろむ名つけて徳若後万載集とやらかす事しかり」、「徳和歌後万載集序／……／あめあきらけき／よつのとし／むつき 山手白人誌（印）」

後付 跋「……ときに天明四年うつきのはしめあけら漢江しるす」

本文 無郭、無界 10 行、字高 17.0 糎

刊記 「天明五年乙巳孟春吉日／狂歌拾遺 嗣出／京都柳馬場四条下ル所本家 須原屋仕入店／大坂順慶町五丁目 柏原屋与左衛門／大坂心齋橋筋伝馬町 柏原屋佐兵衛／江戸東叡山下池之端仲町 須原屋伊八板」

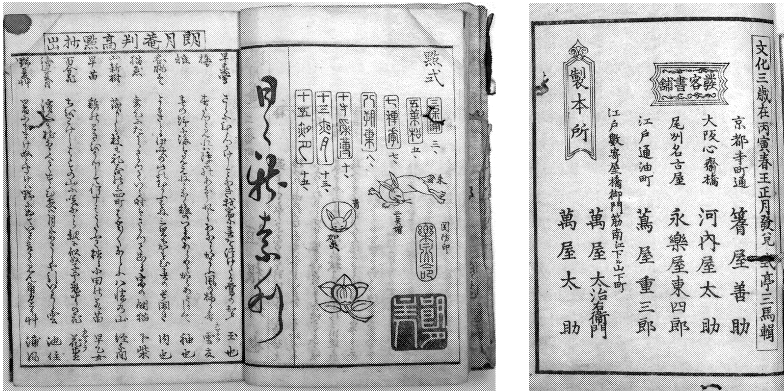
広告 蔵版目録「青黎閣蔵版標目 東叡山池ノ端仲町／須原屋伊八梓」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（上册見返・下册遊紙裏、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）、松紋印（巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎）、「倉氏／之蔵」（各冊巻首、方形陽刻朱印、3.5 × 3.5 糎）、「学厦」（下册巻首右下、方形陰刻朱印、2.2 × 2.2 糎）、「伊（丸で囲み）」（円形陽刻墨印、0.9 × 0.9、上下巻首右上）

備考 中大本は摺刷も良好で初印に近いと思われる。本書には諸種の形態のものが確認される。三つの序跋の位置は不安定で、山手白人序はほぼ前付にあるが、四方赤良と朱楽漢江の序の位置は前後定まらない。また、蔵版目録を付載するものとそうではないものがあり、その目録には 2 丁のものから 8 丁のものまでさまざまある。中大本は 2 丁を備えて掲載書も初印当時のものに近いと思われるが、「初期の二丁から次第に増して八丁のものもある。売行きがよくて宣伝効果が高いためであろう」という濱田義一郎の指摘がある（『大田南畝全集 一』解題、岩波書店、1985.12）。刊記については、須原屋伊八住所が「東叡山下池之端仲町」となっているものと「江戸浅草茅町二丁目」と改刻されているものの二種、そのほかに『万載狂歌集』のものを流用しているものがある（鈴木俊幸蔵本）。また、四方赤良の序第 1 丁が、覆刻による別版で摺刷されているものがある（鈴木俊幸本、静岡県立中央図書館葵文庫本、都立中央図書館東京誌料本、国文学研究資料館本）。
(吉川東)

狂歌 後集 中本1巻1冊

911.19/Sh34(00010480051)



表紙 海老茶色無地、13.2 × 18.3 糎

外題 題籤欠

構成 序2丁、目録2丁、本文24丁、後表紙見返に刊記

丁付 丁裏のど「ケイ後篇序ノ一」「ケイ篇序二」「ケイ後酔 竹目ノ一」「ケイ後酔 竹目ノ三」「ケイ後酔 竹一(二)」「酔竹側ケイ後篇三」「ケイ後篇竹四」「ケイ後酔竹五」「ケイ後篇竹六」「ケイ後酔竹七(八)」「ケイ後竹九(～十二)」「ケイ後篇十三」「ケイ竹十 四」「ケイ後篇十五」「ケイ後竹十六」「ケイ後篇十七」「ケイ後竹十八(～二十)」「ケイ後酔竹廿一(～廿四)」

前付 目録「狂歌 後集／このひとまきはさきにもせし狂歌 にもらしつるはんだちをこと／＼くえりあつめてか／＼げ出せる也猶これにもおくれたる人／＼はまたのちのあつめをまちていやつぎ／＼にくはしうすへきものぞ／……」、序「……／かくいふはむさしの国人式亭のあるし／三馬／文化ふたとせといふとしのさつきすゑつかた／ふみの屋のまとのもとにうつしをへぬ」

本文 四周単辺、無界10行、匡郭左上欄外に「酔亀亭判高点抄出」など見出しあり

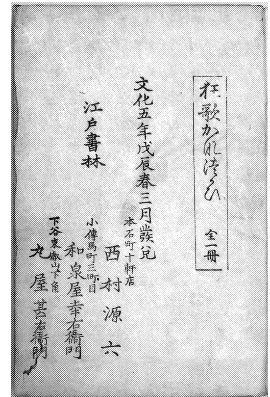
刊記 「文化三歳在丙寅春壬正月発兌 式亭三馬輯／発客書舗 京都寺町通 著屋善助／大阪心斎橋 河内屋太助／尾州名古屋 永楽屋東四郎／江戸通油町 萬屋重三郎／製本所 江戸数寄屋橋御門筋南江下ル山下町 萬屋太治右衛門／萬屋太助」

識語 「春七拾八首／夏六拾七首／秋五拾六首／冬四拾一首／恋五拾一首／雜五拾首／合三百四拾一首（「三百五拾三首」を上から訂正）／砂楽斎」（見返）

印記 見返「花井卓蔵文庫」（矩形陽刻朱印）、卷首「日本書／生山田／喜之印」（方形陰刻朱印）
(五嶋靖弘)

狂歌類題 杓子栗 半紙本 2卷 2冊

911.19/Sh12(00010448801 / 00010480644)



表紙 薄縹色地、栗の実と葉の模様筆彩（乾冊・坤冊で栗の実・葉の模様の違いあり）、
15.9 × 22.7 糎

外題 原題簽「狂歌類題 杓子栗 乾」「狂歌類題 杓子栗 坤」（左肩単杵、3.4 × 15.4 糎）

構成 乾冊 序 1 丁半、目録 2 丁半、本文 51 丁、坤冊 目録 2 丁、本文 64 丁、後序 1 丁、後表紙見返に刊記

柱刻 乾冊 「序一（二）」、「目一（～三）」、「一（～五十一）」、坤冊 「目一（二）」
「目二」、「一（～六十四）」、「跋」

前付 「……／酔月庵叟馬栗の名におふ飯匙を定矩として序らしきものを述けるはや
／寛政十あまりひとゝし／ふみ月ふみをさらす日」、目録「狂歌杓子栗卷之上」
「狂歌杓子栗卷下」

内題 「狂歌杓子栗卷之上」 「狂歌杓子栗卷下」

本文 無郭無罫 14 行、字高 17.7 糎

尾題 「狂歌杓子栗下之卷終」

後付 跋「杓子栗後序 丹作／……」

刊記 「文化五年戊辰春三月発兌／江戸書林／本石町十軒店 西村源六／小伝馬町三
町目 和泉屋幸右衛門／下谷東叡山下角 丸屋甚右衛門」（坤冊後表紙見返）

広告 「狂歌かなつかひ 全一冊」（刊記右）

印記 「下谷伊勢新」（各巻首尾、矩形墨印）、松紋印（巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎）

備考 各表紙右肩に、かねに「本」の伊勢新貸本票の貼付跡あり。

便々館湖鯉鮒（寛延 2 年～文政元年、1749～1818）編類題狂歌集。『国書総目録』には寛政 11 年版として慶應義塾大学図書館本、西尾市立図書館岩瀬文庫本が挙げられてはいるが、これらには刊記がなく、序の年記「寛政十あまりひとゝし」によつたものと思われる。有刊記本の所見はすべて中大本と同様の文化 5 年刊記のものである。（五嶋靖弘）

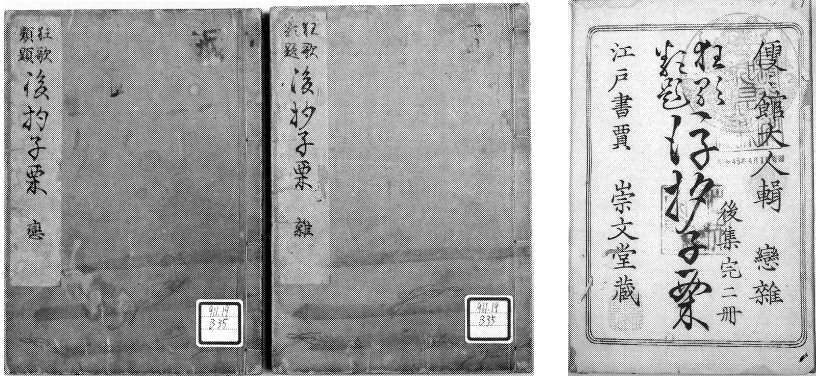
狂歌
類題 **後杓子栗** 半紙本 2 巻 2 冊

911.19/B35(00010429256 / 00010429249)

表紙 薄縹色地に、栗の実と葉の模様手彩（恋冊雑冊で栗の実・葉の模様に違いあり）、
15.9 × 22.7 糎

外題 題簽「狂歌類題後杓子栗 恋」「狂歌類題後杓子栗 雑」（左肩無郭、3.2 × 16.7 糎）

構成 恋冊 見返、目録2丁、本文47丁、雑冊 目録2丁半、本文50丁、後表紙見返に刊記



見返 角丸三重枠内「(魁星印) 便々館大人輯 恋 雑／後集完二冊／狂歌類題 後杓子栗／江戸書買 崇文堂藏 [印]

内題 「狂歌杓子栗下末巻」、内題「狂歌後杓子栗下之巻」 「狂歌杓子栗下末巻」

柱刻 恋冊 「二 目一 (二)」、「二 一 (~四十七)」、雑冊 「二 目一 (~三)」、「二 一 (~五十)」

前付 目録「狂歌後杓子栗下之巻目録／……」

本文 無郭無罫 14行、字高 17.7 糎

尾題 「狂歌後杓子栗下之巻上終」「狂歌後杓子栗下之巻大尾」

刊記 「文政三年庚辰夏／五月中浣購板／江戸書林／崇文堂／前川六左衛門 [印] (「崇文／堂記)」 (雑冊後表紙見返)

印記 「下伊勢新」 (各巻首尾、矩形墨印)、松紋印 (巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎)

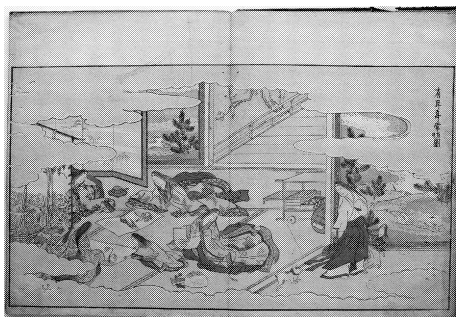
備考 各表紙右肩に、かねに「本」の伊勢新貸本票貼付跡あり。鈴木俊幸所蔵本「狂歌後杓子栗」の「春夏」冊見返に「便々館湖鯉鮒大人輯 春夏／秋冬／前集

四季之部三冊／狂歌類題後杓子栗／東都書肆 崇文堂発兌」とあることから、「狂歌後杓子栗」は、前集「春夏」「秋」「冬」の三冊と、後集「恋」「雑」の二冊から構成されていることがわかる。
(五嶋靖弘)

前条と同じく便々館湖鯉鮒編の類題狂歌集。上記「冬」の刊記に「五月中浣購板」とあることから、前集は五月上旬、後集は中旬に刊行された。

〔四方の巴流〕 刊・折本1帖

911.19/Sh33(00010429751)



表紙 濃縹色布目地に雷紋繫ぎかたばみ菊花散らし、21.0 × 15.5 糎

外題 題籤欠

見返 各冊に目録

構成 序1丁半（見返共）、本文半丁、挿絵見開1丁、本文6丁、挿絵見開1丁、本文3丁、跋1丁（後表紙見返共）

前付 序「……／四方歌垣主人題 [印] [印]」

本文 無郭無界、7首7行

後付 跋「……／一日菴主人／春たてはまつ手に筆をとりの跡／こゝろゆくまゝはなちかきせむ」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日」（巻首、方型陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

備考 挿絵第一図（七福神図寄画）落款「洞秀美敬画／行年七十一歳東牛斎蘭香画／行年六十七歳狩野休円／秀山敬順画／鄰松時六十四歳画／養意惟伝画／ 斎政美／松意茂博画」、挿絵第二図（絵合図）落款「有耳亭常恒図」

四方歌垣真顔編の歳旦狂歌集。「四方の巴流」という書名の狂歌本は、寛政 5 年序の真顔編歳旦狂歌集が一番早い刊行である（京都大学文学部蔵）。次いで寛政 7 年にも同題の真顔偏の狂歌集が折帖仕立て出されるが、これは真顔が赤良から四方姓を継いだことを記念する集である。これが以後の真顔編歳旦狂歌集の一定型となり、巻頭の七福神の挿絵等も踏襲されていく。寛政 8・9 年にも同題の狂歌集が出される。その後の刊本で真顔在世時に確認できるのは、文政 11 年版である。中央大学所蔵本は、その体裁や挿絵を踏襲している上、跋中「ことしも四方の巴流の催しあなれば……」とあることから、「四方の巴流」の題名で編まれた真顔編の歳旦狂歌集であることは間違いなかろう。真顔は文政 12 年に没しているので、それ以前の刊行であることは間違いがないが、刊行年についての徴証は集中に見当たらず（跋末の狂歌にしてもえとの酉を詠み込んだものとは受け取りにくい）、不明である。（鈴木俊幸）

堀川次郎百首題狂歌集 刊・半紙本 1 巻 1 冊

911.19/R63(00010480036)

表紙 薄縹色布目地（後補）、22.6 × 15.4 糎

外題 後補題簽「狂歌次郎百首 六樹園撰 全」（左肩、墨書、無郭、17.4 × 3.4）

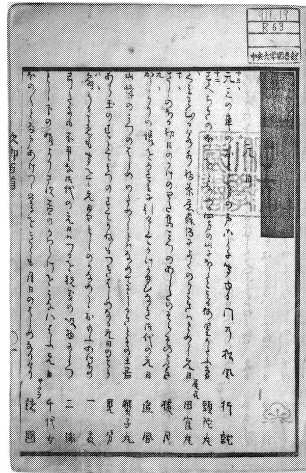
構成 本文 73 丁

柱刻 「次郎百首 ○一（～七十三）」

本文 四周単辺、無界 14 行、匡郭 18.5 × 13.3 糎、挿画 9 図。

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）、松紋印（巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎）

備考 1 丁表内題部分、50 丁裏本文末および尾題部分、51 丁表内題部分、73 丁裏尾題部分は未刻墨釘。六樹園（石川雅望）序文の写し（半紙に墨書、一葉）あり。



1丁表内題と50丁裏尾題は、上田市立図書館花月文庫本（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム）についてみると、内題・尾題ともに「堀川次郎百首題狂歌集」。構成も序文1丁、本文50丁で、本書の51丁以降はない。歌頭傍に付された歌点も合致しないところが散見される。本書に挿まれていた六樹園序文の写しも、こののに刊行されたものから写したものである。兼題に目を向けてみると、「元日」から「旧年立春」まで季節順に配されており、一年の月次狂歌会の詠草をまとめたものであると思われる。51丁以降は「忍恋」から「猿」までであるが、どういった理由で50丁以前と分けられたのかは不明である。また、本書51丁以降にも柱に「次郎百首」と刻されているが、これがどのような題名でまとめられたかについても不明である。なお、本書がまとめられるにあたっては『永久四年百首』が念頭にあったようで、このことは六樹園（石川雅望）序文「永久稿の二郎といひては船頭の名に似たれども……」云々より明らかである。

（浅菘晴子・磯部敦・瀧田裕子）

狂歌新杓子栗 上 中本1巻1冊（下巻欠）

911.18/B35(00010429215)

表紙 薄縹色布目、11.4 × 17.6 糎

外題 題簽「狂歌新杓子栗 上」（左肩単郭）

構成 序2丁、本文31丁

柱刻 「一（～三十一）」

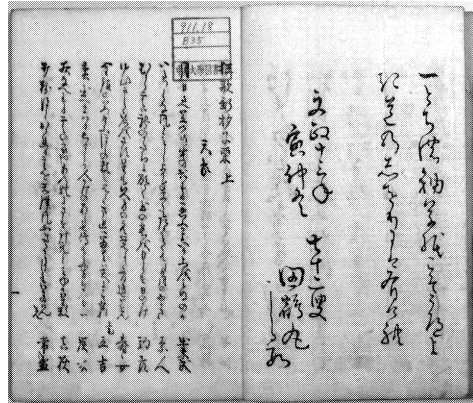
前付 序「……／文政十三年／寅仲冬／七十二叟／田鶴丸しるす」

内題 「狂歌新杓子栗 上」

本文 無郭無界14行、字高14.0糎

尾題 「狂歌新杓子栗上巻終」

備考 天象・地儀・人物・春・夏・秋・曲水・汐干・涅槃・西行忌・彼岸・木・火・土・金・水・井出玉川・摂津玉川・武蔵玉川・野路玉川・野田玉川・紀伊玉川・萩・尾花・葛花・菊の26題。



『国書総目録』は『狂歌書目集成』を拠り所として、二冊、著者便々館、天保元年刊とする。しかし、序文に「六樹便々の名たるふた木の大人たちかえらばれし一とちの袖草紙こそうへよき道のしをりには有りけれ」とあるので、六樹園飯盛と便々館湖鯉鮒の二人の撰とすべきであろう。（五嶋靖弘）

狂歌画像作者部類 大本 2 卷 2 冊

911.19/R63(00010480010/00010480028)



表紙 薄縹色布目、18.5 × 27.6 糎

外題 題簽「狂歌画像作者部類 上(下)」(中央無郭)

構成 上冊 序 2 丁、本文 45 丁、下冊 本文 40 丁、後表紙見返に刊記・広告

柱刻 上冊「作者部類序 一(二)」、「作者部類 一(～四十五)」、下冊「作者部類 四十六(～八十五)」

前付 序「……／六樹園」

本文 四周单边、無罫行数不定

刊記 「文化辛未季秋発行／(広告)／書肆 東武 角丸屋甚助／尾張 永楽屋東四郎梓」

広告 「狂歌初心抄 橘洲大人著 全一冊／同才藏集 四方山人撰 全二冊／同画像作者部類 六樹園大人撰 全二冊／同不卜集 便々館大人撰 全二冊／しみ

のすみか物語 六樹園大人作 全二冊／江戸職人歌合 石原先生著 全二冊
(刊記中)

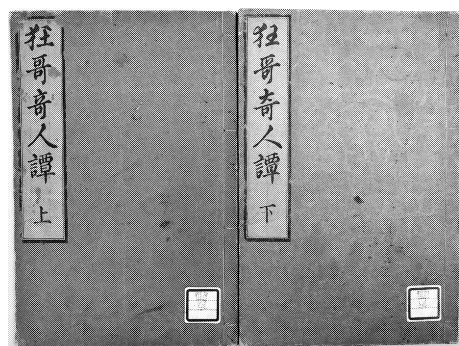
印記 松紋印 (各巻首陽刻緑墨印、1.0 × 1.5 糎)、 「中村図書」 (矩形陽刻朱印)

下段本文には、肖像画とともに狂歌・狂歌師名・別号・住居が半丁に1人ずつ書かれている。総数170人(上冊90人、下冊80人)。頭書は、「古人之部」(1丁表～5丁裏)30人、「現代作者之部」(6丁表～64丁裏)354人、「安永天明之頃作者之部」119人から構成されており、いずれも狂歌・狂歌師名・別号・住居を記す。そのうち84丁裏の「亀占正」、85丁表「文屋古文」、85丁裏「抱亭五清」の3人は肖像画あり。なお、「文屋古文」は「狂歌画像作者部類」の版元永楽屋東四郎である。巻末頭書抱亭五清肖像に「清澄画」とあり、本書で画工を務めた五清の肖像のみ飯盛息石川清澄が手掛けたものようである。

中央大学所蔵本には下巻頭書部分三ヶ所に墨書貼紙がある。すなわち、49丁裏頭書「山井寿女」の記事上に「渋柿本住」の記事、63丁表頭書「紀寛」の記事の上に「三穂浦近」の記事、同裏「笹裏鈴成」の記事の上に「門田稲葉」のそれぞれ墨書による記事が貼り込まれている。
(五嶋靖弘)

狂歌奇人譚 初編 刊・大本2巻2冊

911.19/Ky4(00010429728/00010429736)



表紙 浅縹色、唐草模様艶出、27.2 × 18.1 糎

外題 題簽「狂歌奇人譚 上(下)」(左肩子持梓、18.5×4.0 糎)

構成 上巻 見返、序1丁半、目録1丁、凡例半丁、本文28丁、下巻 本文26丁、狂歌7丁、跋1丁半、広告・刊記半丁

柱刻 「狂歌奇人初編上 序一(～三)」「狂歌奇人初編上 一(～二十八)」「狂歌奇人初編下 一(～二十六)」「狂歌奇人初編下 跋甲(乙)」

前付 序「……/文政七年五月/六樹園主人」

内題 「狂歌現在奇人譚初編之上(下)/東都 八島定岡著」

本文 無郭無界10行、字高19.0 糎、各話に挿絵あり

後付 跋「……/福廼屋内成/文政七年五月」

刊記 「文政七年申歳五月/書肆 江戸日本橋通老丁目 大阪屋茂吉」

広告 「狂歌現在奇人譚初編 二冊 出来/同 後編 二冊 出来/狂歌作者列伝 二冊 出来/俳諧哥奇人譚 三冊 近刻/狂歌古今奇人譚 二冊 近刻」(下巻刊記右)

印記 「長谷川/如是閑/旧蔵/昭和45年4月1日寄贈」(各冊見返、矩形陽刻朱印、5.8×4.0 糎)

天明～文化文政期に活躍した江戸の狂歌師達の逸話を集めそれぞれに一画をそえた逸話集である。三編まで刊行されたが、本資料はその初編のみである。摺刷が細部まで鮮明であり、初印に近いと思われる。

鬼外棲内成、岸廼屋男浪、大川亭厚丸、祭遊亭清喜、祭永亭持丸、文々舎蟹子丸、六樹園飯盛、青寝園真砂子(以上上巻)、浅桐庵一村、新泉園鷺丸、三寸亭草美、塵外棲清澄、五柳園一人、倭和多守、水晶庵染主、形上是粘、壺椿棲哥種(以上下巻)の計17名が取り上げられ、その後ろに、春夏秋冬、雑、恋、拾遺の部類別に半丁10首、計118首の狂歌を付載する。狂歌の作者は主に逸話で取り上げられた人物である。序に「此書にのせたる人々はあへて歌のよしあしにかかはりつるにはあらず、儀を守り礼をあつくし、あるいは聖賢の志ある人、智ある人、博識の人、もの一芸に秀でつる人、またはをかしみある人……」とある通り、特に天明以降に数多く生まれた狂歌の派閥の一つに集中することはないようであるが、定岡自身が属した五側社中が多いように見受けられる。、

編者の八島定岡は岳亭丘山ともいい、本姓は菅原、通称は丸屋斧吉、画号ははじめ春信、のちに定岡、狂名を堀川太郎・堀河多楼、字は鳳卿、岳亭で、五岳、岳山、一老ほかさまざまな別号を持つ。浮世絵と戯作をよくし、画は堤秋栄・魚屋北溪・葛飾北斎に師事し、狂歌を窓廼叢竹、六樹園に学んでいる。(金津有紀子)

狂歌奇人譚 初編・二編・三編 刊・大本3編6巻6冊

911.19/Y61(00013335419/00013335427/00013335435/
00013335445/00013335456/00013335666)

表紙 藍色、雲に唐草模様艶出、24.8 × 17.7 糎

外題 題簽「狂歌奇人譚 上(下)」「狂歌奇人譚^{二編} 上(下)」「狂歌奇人譚^{三編} 上(下)」(左肩子持枠、18.5 × 4.0 糎)

見返 初編「八島定岡著／狂歌奇人譚／愛知書肆 文光堂蔵」(紅色料紙、四周双边)

構成 初編上 見返、序1丁半、目録1丁、凡例半丁、本文28丁、初編下 本文26丁、跋1丁半、広告・刊記半丁、二編上 序1丁半、目録1丁、凡例半丁、本文26丁、二編下 本文25丁半、跋2丁、広告・刊記半丁、三編上 序1丁半、目録1丁、凡例半丁、本文27丁、三編下 本文24丁半、刊記半丁、跋1丁

柱刻 初編「狂歌奇人初編上 序一(～三)」「狂歌奇人初編上 一(～二十八)」「狂歌奇人初編下 一(～二十六)」「狂歌奇人初編下 跋甲(乙)」、二編「狂歌奇人後編上 序一(～三)」「狂歌奇人後編上 一(～二十六)」「狂歌奇人後編下 一(～二十八)」、三編「狂歌奇人三編上 序一(～三)」「狂歌奇人三編上 一(～二十七)」「狂歌奇人三編下 一(～二十六)」

前付 初編序「……／文政七年五月／六樹園主人」、二編序「……／文政七年歳次閑逢 灘閏八月／源朝臣光博選 [印] (光博)／臣直方謹書 [印] (直方) [印] (子肖)、三編序「……／六樹園」

内題 「狂歌現在奇人譚初編之上(下)／東都 八島定岡著」、「狂歌現在奇人譚後編上(下)／東武 八島定岡著」、「狂歌現在奇人譚三編上(下)／東武 八島定岡著」

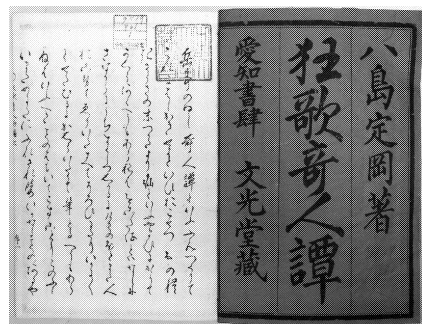
本文 無郭無界10行、字高19.0糎、各話に挿絵あり

後付 初編跋「……／福廼屋内成／文政七年五月」、二編跋「……／福廼屋内成／文政七年閏八月」、三編跋「……／文々舎蟹子丸／小臺堂書」

刊記 初編「文政七年申歳五月／書肆 江戸日本橋通老丁目 大阪屋茂吉」、二編「東都書房 日本橋通り一丁目 大坂屋茂吉」、三編「狂歌現在奇人譚 /初編/二編/三編／筆者 黙齋三考／彫刻 野瀬保治／東都書房 日本橋通老丁目 大阪屋茂吉」

広告「狂歌現在奇人譚初編 二冊 出来／同 後編 二冊 出来／狂哥作者列伝 二冊 出来／俳諧哥奇人譚 三冊 近刻／狂歌古今奇人譚 二冊 近刻」（初編下巻刊記右）、「狂歌現在奇人譚 初編 二編 三編 出来／俳諧和歌奇人譚 近刻／古今画家奇人譚 近刻／一老物語 全部五冊近刻」（二編下巻刊記右）

備考 狂歌師の逸話集。各編上下2巻2冊、都合6巻6冊からなる。『日本古典文学大辞典』によると三編に定岡自身が全国から撰集した狂歌を集めた「歌之部」が1冊加えられ、3編7冊となるとあるが、当該本は「歌之部」を欠く。



こちらの初編には、前条にあった狂歌は付されていない。初編17人の他、二編には、橘五園香久美、曲亭馬琴、花栖亭直芳、浅紫庵仲住、千柳亭唐丸、万宝亭喜樽、酒廼屋呑安（以上上巻）、緑樹園元有、春秋庵永女、浅穎庵千本、穎風園千直、壺月堂市住、金母樓種義、茅一園義澄（以上下巻）の14名。三編には、三筆棲胤成、十返舎一九、六時園多利雄、松風舎茶廊、貢琴棲根松、世間亭吉住、要義園近住、和調亭末永（以上上巻）、唐樹園南陀羅、五明棲鳩照、一秋亭落霞、串珠園光音、文景

見返 紅色料紙、記事なし

柱刻 「 ○ 」

前付 序「……／明治卅三年六月 正三位冷泉為紀伯 花野舌長しるす」

本文 四周単辺（朱摺匡郭、19.5 × 12.6 糎）、無界 10 行

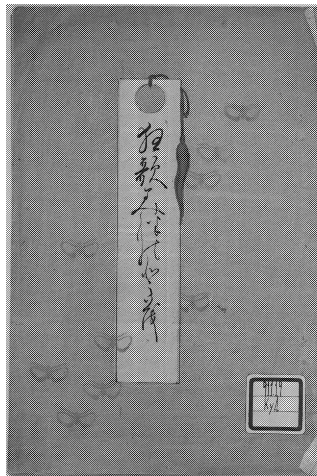
刊記 「京都 八重垣社蔵」（後表紙見返）

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）、「非売品」（前付 1 丁表右上欄外、小判型陽刻朱印）

月次会の返草 1 年分をまとめて 1 冊としたものか。各丁ごとに「一月並兼題」から「十二月並兼題」までを配し、各月次会における高点の詠歌を前付短冊に掲載する。この短冊は半丁に 6 首、計 36 首を載せる。蔵版者の八重垣社とは、八重垣社左刀のこと。京都の狂歌師を中心に、大阪、名古屋の狂歌師連中の詠歌が載る。月次会には柳条亭、神森社、西行庵法浅、都柳軒、千尋舎、月廼家、僧正坊、稲の家らが判者として名をつらねる。
(浅埜晴子・磯部敦)

狂歌みつのとも 刊・半紙本（仮綴）1 卷 1 冊

911.19/ky4(00010429744)



表紙 灰色雲母散らし地に、紋白蝶九羽を配す（摺）、23.6 × 15.8 糎

外題 摺付「狂歌みつのも」 （中央無郭、15.5 × 3.2 糎）

構成 序 1 丁、本文 6 丁

柱刻 「 一（～六）」

前付 序「……／明治庚子卯花月 桃の屋主人識」

内題 「本町側連入披露狂歌合／桃廼屋 文廼屋 蟹廼屋 蓮の屋池住 染の屋美水 都々の屋漁舟 選」

本文 無辺無界 14 行、末に「明治三十三年四月」、薄墨で雲を刷出した料紙

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

主宰については、内題「本町側連入披露狂歌合」とあることより明らかであろう。風流部長（寺山星川）「狂歌見聞（上）」（『時事新報』雑報、明治 29 年 3 月 4 日）によれば、本町側は世情の推移とともに詠調も変わろうとするところから改進黨とも呼ばれており、それを統べていたのが桃廼屋鶴彦（飯野忠一）であったという。当の桃廼屋じしんによれば、「……其中興の祖と仰きたる赤良の四方側、橘洲の酔竹側などハ名をのみ残して今日一人の伝ふる者なく、唯其当時よりして連綿残続なせるハ裏住の本町側のみ。余等其末流にあれハ微々なからも斯道の振興を計る。……今後益江戸調狂歌の伝統を苧環の糸に繋ぎて拡張を図り、併せて明治の赤良・橘洲を出さんことを期す。……」云々と序文にいう。（浅埜晴子・磯部敦）

狂歌三都の賑ひ 刊（活版）・半紙本（大和綴）1 巻 1 冊

911.19/A36(00010429462)

表紙 枇杷茶色地洋紙に、梅枝に鶯、水面の蛙、丸囲に「本」の模様摺付、22.7 × 16.1 糎

外題 摺付「狂歌三都の賑ひ 全」（中央無郭、13.0 × 3.6 糎）

構成 見返、本文 7 頁、刊記 1 頁

見返 歌三首（蜀山、白玉翁、貞柳）

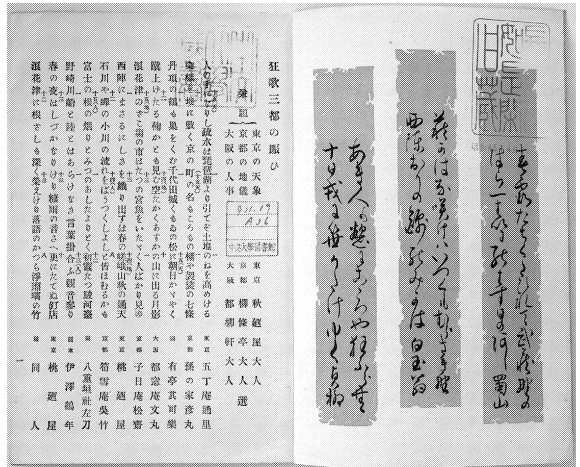
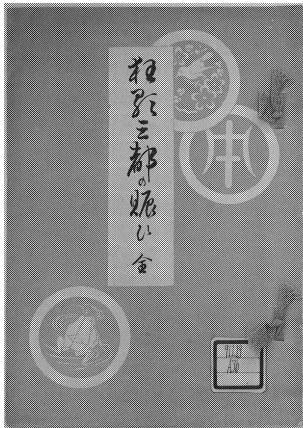
柱刻 ノンブル「一」～「七」

内題 「狂歌三都の賑ひ／兼題 東京の天象 京都の地儀 大阪の人事／東京 秋廻屋大人 京都 柳条亭大人 大阪 都柳軒大人 選」

本文 無辺無界 15 行、字高 18.5 糎、末に「明治卅六年三月廿二日於東京鍛冶橋外油屋開巻披講」

刊記 「東京 蟹廼屋蔵版」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

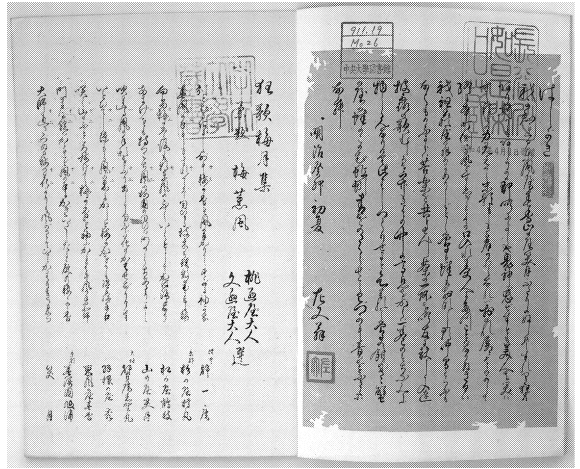
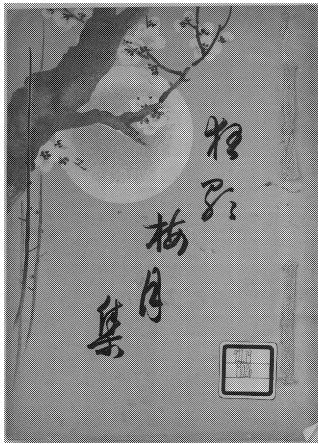


後表紙無し。書名『三都の賑ひ』は、兼題「東京の天象／京都の地儀／大阪の人事」にちなんだものか。表紙の図は、本書の主宰が本町側と鶯蛙会であったことを示していよう。蔵版者の「蟹廼屋」とは、戯作者仮名垣魯文の門下にいた野崎左文のこと。その左文の『私の見た明治文壇』（春陽堂、1927年）によれば、鶯蛙会とは、桃廼屋鶴彦が「秋廻屋望成（梅本塵山人）、四世絵馬屋（田沼額輔）、三世面堂（津久井安久楽）、四世弥生庵（海老原雛興）、四世琴通舎（三井富雄）等新進気鋭の作

家を率ゐて青年狂歌会を興し、後に之を鶯蛙会と改め」たもので、その後「花廻屋かつぎ香哉（三上氏）、首尾の屋松蔭（宮田氏）、春廻屋梅雄（渡辺氏）、文字の屋関守（鈴木氏）、鶴の屋千寿（羽生氏）等の数名、判者となつて続々鶯蛙会に入」ったのだという（pp.361-371。句読点引用者、ルビは適宜省略）。結成年月については左文の語るところではないが、「文盲の眼も明らけて治る二十八年の春、桃廻屋鶴彦の主唱にて、絵馬屋額輔と斯く云ふ事も尻馬に乗りて、鶯蛙狂歌会といふ団体をつくり」云々という秋廻屋望成の証言がそなわる（鶯蛙会編『狂歌競鳴集』、1924年、秋廻屋望成序）。鶯蛙会の終焉については不明だが、前掲秋廻屋序文によれば「いささか障ることありて、鶯蛙も久しく鳴く声を停めたり」とある。（浅塾晴子・磯部敦）

狂歌梅月集 刊（石版）・半紙本（大和綴）1巻1冊

911.19/Mo20(00010479293)



表紙 灰色地洋紙に梅枝に月摺付（石版）、22.8 × 16.4 種

外題 摺付「狂歌梅月集」

構成 見返に序、本文4丁

見返 序「はしがき／……／明治癸卯初夏 左文翁」

内題 「狂歌梅月集／兼題 梅薫風／桃廼屋大人 文廼屋大人 選」

本文 無辺無界 12 行、字高 17.3 糎、末に「以上、歌数五百七十六首、作者九十六名の内抜粋／明治三十拾六年三月廿三日京橋区五郎兵衛町油屋開卷披講」

刊記 後表紙見返に「青柳堂製」（円形陽刻朱印、1.5 × 0.5 糎）

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

野崎左文序に本書成立のいきさつが記してあり、東風屋寿香と山の屋笑月の入連披露狂歌会において高点をとった歌をまとめたものとのことだが、明治 33 年 4 月の年記を有する『狂歌みつのも』（内題「本町側連入披露狂歌会」に「山本笑月」の名をみいだしうる。撰者をつとめている「文廼屋」とは「文の屋^{ひでしげ}秀茂」のことで、明治 27 年 4 月、日本橋倶楽部にて本町側判者披露をおこなった（『読売新聞』雑報、明治 27 年 4 月 9 日）。また後表紙見返に押捺される「青柳堂」とは「日本橋区新右衛門町六番地^{せいりゅう}青柳堂」（『読売新聞』雑報、明治 29 年 3 月 3 日）のことで、野崎左文本町側判者披露狂歌会開筵のさいの詠首届所であった。なお、本書には上田花月の詠首も入集している。

（浅埜晴子・磯部敦）

狂歌競鳴集 刊(活版)・半紙本(大和綴) 1 巻 1 冊

911.19/O11(00010479764)

表紙 鳶色雲母散らし地に鶯と蛙（前表紙）・梅と水（後表紙）の文様摺付、24.0 × 16.3 糎

外題 摺付「^{狂歌}競鳴集」（中央無郭、18.5 × 3.3 糎）

構成 見返、序 1 丁、本文 16 丁半、「鶯蛙会員」名簿半丁、跋 1 丁、跋半丁、刊記半丁

見返 小松の絵

前付 序「……／秋農屋安倍川望成」

内題 「^{狂歌}競鳴集／秋農屋選／鶯蛙会編」

本文 無辺無界 10 行、字高 18.0 糎

尾題 「狂歌競鳴集 (終)」

後付 名寄「鶯蛙会員／……」、跋「跋／……／井之頭公園の畔なる自任庵に於て／阿武羅蟬成しるす」、跋「……／大正十三年初夏 小秋人園蝸しるす」

刊記 「編輯兼出版人 海老沢猿山人 府下武蔵野村吉祥寺二〇八一／印刷人 波屋大海堂 吉田弥一郎 東京市京橋区加賀町六」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」 (見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)



鶯蛙会再興以後に行われた月次狂歌会詠草のなかから、秋の屋望成が高点の秀歌を選び一巻としたもの。鶯蛙会の再興について、阿武羅蟬成(海老沢久太郎)跋文に「抑わが鶯蛙会の再興せられしハ大正六年正月、薬海房子の許に呑次、福外、朶城の三子会合せるとき、坐談たま／＼狂歌のことに及び、互に斯道を辿らんと語りしが、孰れも不知案内にして其方向に迷ひしも、幸に呑次子ハ故桃の屋翁の姻戚なる因に抛り、同翁に親炙せる秋農屋うしを迎へて先達と頼み、呑次子を世話人となして月

次狂歌の筈を開き、且曩に故翁の創立せられたる鶯蛙会の名を襲ひたりき。……」
とある。後付に「鶯蛙会員」として20名が名を連ねる。 (浅塾晴子・磯部敦)

豊の秋 刊 (コロタイプ) ・半紙本1巻1冊 (大和綴)

911.19/W24(00010480465)

表紙 薄茶色布目、24.4 × 17.3 糎

外題 題簽「豊の秋」 (中央上、無郭、鬱曇料紙)

構成 遊紙1丁、口絵写真1丁、題歌1丁、序1丁、本文10丁 (末に刊記)

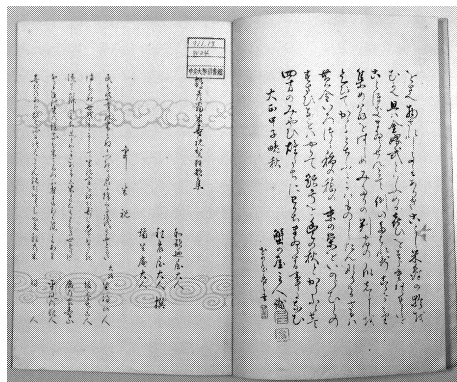
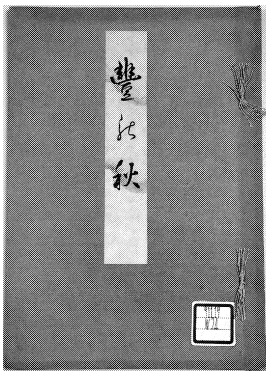
前付 肖像「小田原別荘に於ける大倉鶴彦大人」、題歌「……／八十八叟 [印] (鶴彦之印)」、序「序／……／大正甲子晩秋 蟹廼屋主人識 [印] (左) [印] (文)／花の屋香書 [印] (甘香)」

内題 「鶴彦翁米寿祝賀狂歌集 和歌廼屋大人／秋農屋大人／彌生庵大人 撰」

本文 無辺無界10行、字高17.5糎、本文料紙は紫雲に水をあしらった模様入り

刊記 「総集歌千百六十六首、出詠人員貳百〇参名／大正十三年十一月一日製本出詠者諸君へ配布す (非売品)」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和45年4月1日寄贈」 (肖像裏、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)

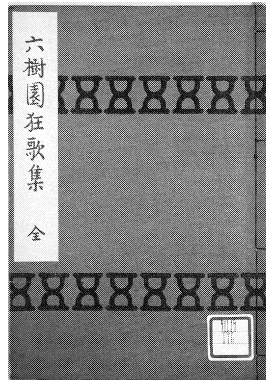


『豊の秋』は鶴彦の米寿賀集である。これ以前にも、『青葉わか葉』・『鶴の友』がそれぞれの祝賀に合わせて刊行されている。和歌廼屋鶴彦、本名大倉喜八郎（天保八年～昭和三年）は大倉財閥を創りあげた実業家で、幼名を鶴吉といい、檜園梅明（檜垣連）を狂歌の師とした。梅明は序にも名が挙がっているが本名田中重兵衛、日本橋長谷川町に居住し、通二丁目の茶舗山本山の差配人を勤めた人物である。

【参考文献】大成建設編『大成建設社史』（1963、大成建設株式会社）（瀧田裕子）

六樹園狂歌集 刊（コロタイプ・活版）・半紙本 1 卷 1 冊

911.19/I76(00010249504)



表紙 縹色布目地に五側の紋様、24.1 × 17.0 糎

外題 題簽「六樹園狂歌集 全」（左肩、無郭）

構成 序 1 丁、「六樹園小伝」1 丁、遊紙、扉半丁、口絵写真 2 丁、本文 38 丁、跋 1 丁、解題 14 頁、「石川雅望翁の系譜」綴込

丁付 「一」～「三十九」、「一」～「一四」（頁）

前付 序「換序／……／己巳一月十日 野崎左文／西山雅契 研北」、「六樹園翁小伝」、口絵写真（短冊・扇面・色紙）

内題 「六樹園狂歌集」

本文 無辺無界、序 12 行、本文 14 行、解題四周双边二段組各 23 行

尾題 「六樹園狂歌集 尾」

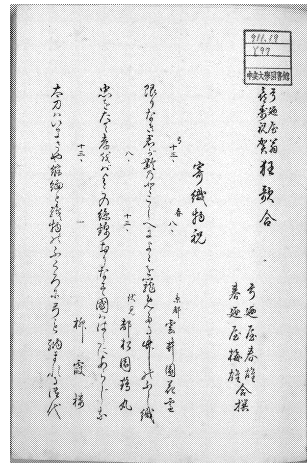
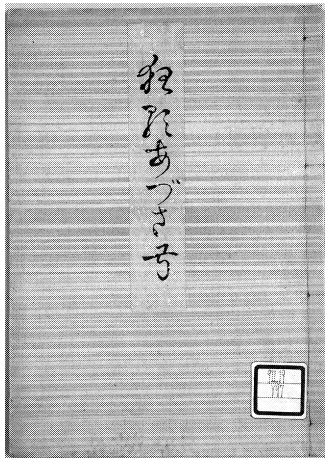
後付 跋「……／昭和四己巳年 月 日 西山清太郎」、解題「石川雅望翁の家系／西山清太郎／……」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

六樹園百回忌に際し、西山清太郎が狩野快庵を通じて野崎左文に編集を依頼したものとみられる。明治 41 年に刊行された『新群書類従 第十』（国書刊行会）所収『六樹園家集』（左文編）後に改めて涉獵・採取した 200 首程度が加えられている。巻末に西山清太郎による雅望の家系研究があるが、その冒頭によれば、これは『浮世絵志』（芸艸堂、昭和 4）第 8・9 号に「石川豊信の家」と題して発表されたものの改刷再録。
(瀧田裕子)

狂歌あづさ弓 刊（コロタイプ）・半紙本 1 卷 1 冊

911.19/Y97(00010478675)



表紙 布目地横刷毛、23.8 × 16.8 糎

外題 題簽「狂歌あづさ弓」（中央、無郭、金砂子料紙）

構成 序2丁、遊紙1丁、肖像（写真）半丁、題歌半丁、本文11丁、「小叙」（跋）1丁半

前付 序「弓廼屋翁狂歌集の序／……／昭和九年初秋 蟹廼屋老人識」、肖像、題歌「弓廼屋」

内題 「弓廼屋翁狂歌合／弓廼屋春雄合撰」
喜寿祝賀 春廼屋梅雄

本文 無辺無界10行（前・後序9行）、字高17.5糎、本文末に「昭和九年六月十七日於東京幡ヶ谷笹塚蟹廼屋草庵開卷、出詠者七十七名、歌數四百五十余首」

尾題 「喜寿祝賀狂歌集 畢」

後付 「小叙／……」（履歴他略伝）印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和45年4月1日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8×4.0糎）

備考 後表紙見返に包紙（綴紐）

弓廼屋・春廼屋合撰「寄織物祝」、「房総名所」、山の屋笑月撰「當座百貨店」、蟹の屋左文撰「當座老人遊戯」が収められている。弓廼屋は本名高橋伊之助、安政五年房州の生まれで日本橋白木屋に勤め、柴井町に呉服店を開いたがその後も三越等呉服関係を転々とする。先に挙げた歌題は何れも弓廼屋に関わり深いものである。跋（小叙）によれば、初号波良のや房成、鎧亭株登、別号樹白雲、山の秋人、山の億住、山の仲住と称した。序を寄せた左文と同年の生まれで、同時期に本町側糸巻連に属したことから親交があったと推測される。（瀧田裕子）

貳拾七番魚果狂歌合 刊（コロタイプ）・中本1巻1冊

911.19/ka55(00010429710)

表紙 樺色無地、19.2×13.1糎

外題 題簽「貳拾七番魚果狂歌合」（左肩、無郭、12.8×3.0糎）

構成 扉半丁、口絵半丁、序1丁、本文9丁半、跋半丁（末に刊記）

扉題 「蟹廼屋詞宗／喜字年賀紀念／魚果狂歌合／題左 春魚類 秋果物／判者蟹廼屋大人」

前付 野崎左文自画像および題詠、口絵「自画像 [印] (左文)」、序「……秋農屋のあるじ望成なり。／昭和九年晩夏」

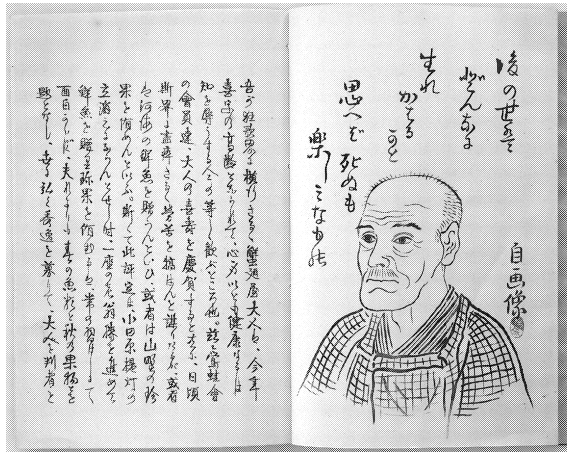
本文 無辺無界 14 行内外、字高 14.1 糎、判詞は朱摺

後付 跋「跋／……／鶯蛙会の同人」

刊記 「此二十七番魚果狂歌合ハ五十部ヲ限り印刷シテ会員ニ頒ツ／昭和九年八月鶯蛙会代表海老沢久太郎」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」 (見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)

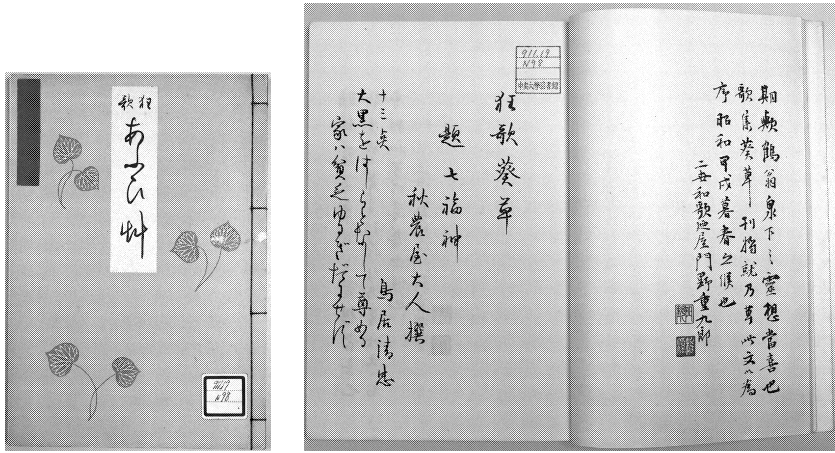
備考 昭和 9 年 8 月の「鶯蛙会月次狂歌」(秋農屋、杜廼屋選)詠草添付(半紙 3 丁、謄写版)



蟹廼屋 (野崎左文) の喜寿を記念して行なわれた鶯蛙会狂歌合の詠草。「集れる数百首の狂歌の中より予め秀逸を選び、これを左右に分」けて蟹廼屋に判者を仰ぐ (秋農屋序)。54 首 27 番の狂歌合を掲載するが、それぞれに左文の判詞が記載されているのは興味深い。なお野崎左文は、本書が頒布された約 1 年後の昭和 10 年 6 月 8 日に没した。(浅塾晴子・磯部敦)

狂歌あふひ艸 刊 (コロタイプ) ・半紙本1巻1冊

911.19/N98(00010479558)



表紙 若草地に葵紋様、24.5 × 16.8 糎

外題 題簽「狂歌あふひ艸」(中央上、無郭)

構成 扉半丁、肖像(写真)1丁、序2丁、本文25丁、跋2丁

扉題 「大倉鶴彦翁七周忌追善 狂歌集」
二世和歌廼屋襲名披露

前付 肖像写真二枚「晩年の大倉鶴彦翁」「二世和歌廼屋椎溪」、序「……／昭和甲戌暮春之候也／二世和歌廼屋門野重九郎 [印] (門野) [印] (椎溪)」

内題 「狂歌葵草」

本文 無辺無界、序8行、本文9行、跋12行、字高17.5 糎

尾題 「狂歌葵草 終」

後付 跋「葵草のしりへに記す／……／昭和甲戌のとし初夏／後進 野崎左文」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和45年4月1日寄贈」(見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)

備考 他にもう一本同一書あり (0001047954)。

大倉鶴彦は初代和歌廼屋 (旧号和歌廼門) のことで、本名大倉喜八郎。天保8年生、昭和3年没 (『大倉鶴彦翁』鶴友会編集発行、大正13年9月)。二世和歌廼屋序文によれば、初代和歌廼屋七周忌追善および二世襲名披露狂歌会の主催は鶴友会、補翼に本町側鶯蛙会、野崎左文・伊坂氏・西村氏と二世和歌廼屋が幹事にあたり、大倉邸茶室にておこなわれたとのこと。書名「葵草」は、大倉邸が「紅陵葵坊」、すなわち「赤坂葵町」 (『読売新聞』「豆えん筆」、大正7年2月4日) にあったことに由来するか。さて、蟹廼屋野崎左文しるすところの跋文について、初代和歌廼屋の事跡を追いながら幕末から明治大正期の狂歌界にいささかふれているので、以下に抜粋する。「……当時翁が狂歌にいそしみたまひつる事は、安政の末つかたより慶応三年に至るまでの間に和歌廼門の名を掲げたる狂歌集十数部の刊行あり。猶、甲乙録といへる角力番付になぞらへたる摺物にも、屢々翁の雅号を散見せし事もありき。かくて明治の混沌期に入りては狂歌も姑く萎靡として振はざりしも、猶全く吟誦を廃したまはず、時事問題に触れてくちずさまれし諷詠、今も記録に存するもの多かりけり。後ち明治三十四の年、和歌廼門を和歌廼屋と改めて我が本町側の判者の列に加はり給ひ、此時狂歌集『青葉わか葉』を刊行し、引続き七十七歳の時には『狂歌鶴の友』、八十八歳の時には『狂歌豊の秋』及家集『鶴彦集』をものせられ、没後一周忌にはこの『葵草』を鶴友会に於て刊行せられしなど、之が為めに狂歌壇を賑はせしこと幾ばくなるを知らず。就中、翁が資本を補助して、大正五年四月より月々発行せし狂歌専門雑誌の『みなおもしろ』が、殆ど七年の永きに涉りて続刊せられしことハ、今猶同好者の記憶に新たなる所なるべし。……」。『みなおもしろ』は野崎左文を編集兼発行者とした大正5年4月創刊の狂歌雑誌。鶴彦は創刊号から撰者として参加、彙報には「鶴彦翁の感涙会」「狂歌鶴の友」の記事が載せられ、号を重ねた後には名誉会員として名を連ねた。

【参考文献】鶴友会『大倉鶴彦翁』(大正13年、鶴友会) (浅埜晴子・磯部敦・瀧田裕子)

狂歌春秋 刊(謄写版)・小本1巻1冊

911.19/A36(00010429231)

表紙 丁字色無地、16.1×12.0 種

外題 題簽「狂歌春秋」(左肩、四周単辺、9.8×2.5 種)

構成 扉半丁、本文 18 丁半、跋半丁

扉題 「秋農屋執筆／狂歌春秋」

内題 「狂歌春秋／秋農屋執筆」

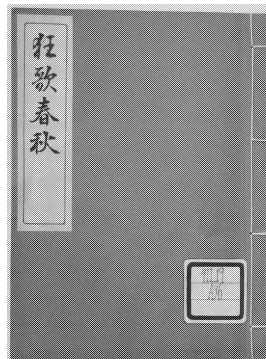
丁付 各丁裏ノドに「老」～「式〇」

前付 扉「秋農屋執筆／狂歌春秋／此の片々たる印刷物は、狂歌界の諸氏に一読を乞ふものであるが、一読するに足らずとて、紙屑籠に投入されても宜しい。なほ時機をみて、続刊する心算である。」

本文 四周単辺、匡郭 11.7 × 7.9 糎、無界 12 行

後付 跋「……／昭和九年七月二十六日」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）



秋の屋望成の現代狂歌批判の書。狂歌師が言語力にとぼしく、にもかかわらず技巧にはしり模倣に終始する現状を批判する。扉に「時機をみて、続刊する心算である」というが、このつづきが刊行された形跡はみない。著者の秋の屋望成について、野崎左文による小伝がそなわるので以下に抄出す。「秋農屋大人之伝／……大人は幼名「鉦太郎」、長じて後「鐘太郎」と改め、晩年更に「高節」と改む。文久二年

九月二十七日、谷中三崎町枇杷橋の東北畔に生る。幼にして伯母の家に養はれ、明治七年十一月、家督を相続して質屋と売薬とを家業とし、後之を罷め銀行員となりて今日に至れり。初祖以来の遺伝として、大人も亦幼年時代より好みて文芸に親しみ、明治十一年五月、『風雅新誌』に漢詩を寄せられたるを始めとして、都鄙に発行する文芸雑誌に詩歌を投吟し、其名漸く著はる。狂歌は全十六年十月、『雅学雑誌』に「小春」といふ課題に唯一投吟したるを最初とし、寄稿毎に入選を得ざる事は稀なり。全二十一年十月、初めて我が本町側に加盟して、戯名を「安倍川望成」、別号を「華の屋」といへり。全二十四年一月に至り、先輩の推薦に依りて判者に列し、別号を「秋農屋」と改め、其の披露の狂歌会を全月七日、本郷三丁目の万金楼に開きぬ。全二十七年の春には桃の屋鶴彦、絵馬屋額輔等諸氏と共に青年狂歌会を起し、翌年一月、青年狂歌会を鶯蛙会と改称して月々『鶯蛙狂歌集』を発行し、専ら編輯の任に当り、又自ら『狂歌文庫』と題する一書を発行して初学者を奨励し、其他『今昔狂歌叢話』『蜀山狂歌叢談』等の著ありて斯道の為に尽すところ勘からず。別に其頃勃興せる新波の俳句に指を染め、「塵山」と号して秋声会の人々と交遊し、また狂詩に川柳に適く所として可ならざるなく、而して「損益堂」「古狸窟」「夏炉庵」「冬扇房」「天明廬」「黒眼子」「九郎丸」「嗜餅翁」「掬古老人」「鼓膜舎」等の別号あり。……/辱知生蟹屋左文識（秋農屋望成『^狂歌一笑一詠』、梅本高節（秋農屋望成）、大正10年1月。文中のカギ括弧・句読点は引用者）。自選私家集に『^狂歌一笑一詠』、『^訂正吾家の狂歌』（昭和8年11月）などがあり、昭和12年7月刊『^狂歌反古袋』を最後に活動は跡絶えたようである。明治末から昭和にかけて、蟹の屋野崎左文とともに斯界を代表する狂歌師であった。

（浅塾晴子・磯部敦）

四方赤良 **めでた百首夷歌** 刊（活版）・小本（大和綴）1巻1冊

911.19/Y81(00010479780)

表紙 煤竹色布目、16.0×11.9 糎

外題 題簽「^{四方}赤良 **めでた百首夷歌**」（左肩子持枠、9.8×2.9 糎）

構成 扉半丁、序半丁、図版1枚、本文8丁半、刊記半丁

内題 「四方赤良 **めでた百首夷歌**（天明四年版）」

柱刻 「（魚尾） [一]（～[九]）」

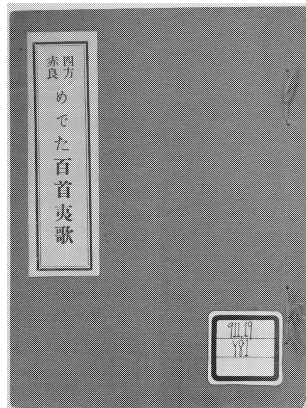
前付 扉「恭賀新禧 野崎左文／乙卯元旦」、序「……／蟹の屋」、図版「栄之筆蜀山肖像」

本文 四周双边、無界 12 行、匡郭 12.9 × 9.3 種

尾題 「目出度百首 大尾」

刊記 「大正四年一月一日（代謄写）／野崎左文／門司市葛葉町」

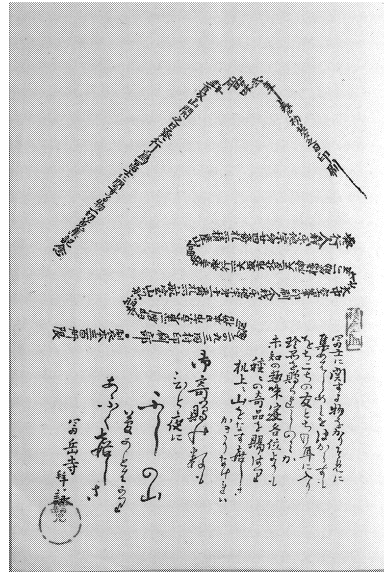
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 種）



天明 4 年版「めでた百首夷歌」の翻刻。序文に、「古狂歌集の翻刻もおひ／＼種切れと相成候に付、本年は珍らしくもなき蜀山人の『めでた百首』をわざとお年玉進上仕候」とあることより、毎年狂歌の翻刻は行っていたようである。こういった翻刻作業は、翌年四月より刊行がはじまる狂歌雑誌『みなおもしろ』に引き継がれていったか。なお、前付に掲載されるところの「栄之筆蜀山肖像」は、絵馬屋額輔（四世絵馬屋、田沼額輔）が秘蔵していたものとのことである。（浅埜晴子・磯部敦）

ふじ狂歌百首 刊（コロタイプ）・中本（大和綴）1 卷 1 冊

911.19/Ka55(00008404907)



表紙 素色雲母散らし地に空色で富士を象る（見返に連続）、19.6 × 13.7 糎

外題 摺付（銀色）「ふじ狂歌百首」（左肩）、右下に朱色で「富士山洞発兌」

構成 見返、扉、序1丁、本文4丁、後表紙見返に刊記

前付 扉、序「はしがき／……／大正丙寅のとし初秋 蟹廼屋主人 [印]（左文）」

内題 「狂歌富士百首／蟹廼屋左文選」

本文 無郭無界13行、字高15.1 糎

尾題 「狂歌富士百首 終」

刊記 「昭和貳年春初夢之日印刷／同年夏山開之日発行為富士に関する物一切蒐集記念／発行人我楽他宗第廿四番札所積塵山富岳寺発行所大坂市北区天神橋筋一の五十七大中空峯印刷人我楽他宗第十一番札所航宝山船舶寺印刷所東京市日本橋区通二の九三田村印刷部●製本三百冊限／富士に関する物をかりそめに集めはしめしをはからすもをちこちの友とちの耳に入り珍品を贈られしのみ

か未知の趣味家各位よりも種々の奇品を賜はり机上ニ山をなす嬉しきかきりなければ／御寄贈の数もひと夜にふしの山夢かとはかりあふく嬉しき／富岳寺
拝詠 [印]

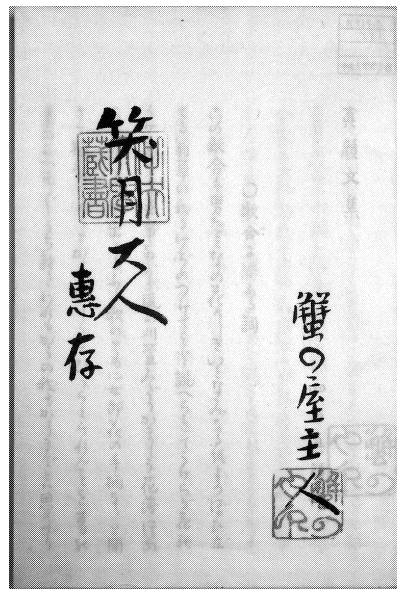
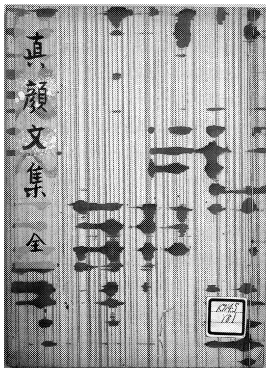
印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8
× 4.0 種）

備考 版下は左文。

左文序文によれば、曾我部一紅の依頼により、富士を題に詠んだ古今の狂歌百首を左文が選び、編んだもの。狂歌雑誌「みなおもしろ」に連載すべく大正 14 年 1 月号に三分の一ほど掲載したが、同誌廃刊により頓挫、その草稿を富士山関係物の蒐集家である大阪の富岳洞大中空降らしに清書して与えたものを富岳洞が印行したもの。
(鈴木俊幸)

真顔文集 写（野崎左文自筆）・大本 1 卷 1 冊

911.19/Y81(00012395174)



表紙 渋刷毛引、26.2 × 18.9 糎

外題 題簽「真顔文集 全」（墨書、左肩、無郭）

構成 扉 1 丁、本文 56 丁、遊紙 1 丁

内題 「真顔文集／四方真顔作 [印]（蟹の／屋印）」

本文 無辺無界 10 行、字高 20.3 糎、末に「蟹廼屋筆写 [印]（左文）」

尾題 「真顔文集 大尾」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎）

識語 「蟹の屋主人 [印]（蟹の／屋印）／笑月大人／恵存」（扉）

四方真顔の狂文集。『平荷文集』同様、家集に洩れた小文を集めて左文が編集したもので自筆本である。山本笑月に贈られたものであることも『平荷文集』と同じである。他に伝本はない。以下記事を列挙しておく。歌合に添ふる詞・里芋をほむる辞・梨を謝することば・賛泉堂の記・好成翁に贈ることば鶴・点歌移陣手鑑の序・遅日庵のあるじに贈る詞・菊字堂の記・牡丹石を得てよろこびひたへずつくれる詞・三島暦の叙・伊勢人の歌に題する詞・與斜窓の記・慕縁の文・菊軒を立出る時山東主人の画ける達磨の図に賛を乞はれて主人に贈る・鶴林荘におくる詞・松風の里にて作れる詞・璞洲ぬしの父君に贈る詞・璞洲ぬしに贈る詞・短冊はさみにするす詞・蟲成翁家集の序・精撰集の序・再び戯歌をすゝむる詞・狸の図に題する辞・麦中庵の記・古銭帖に題する詞・俵石亭の記・倉澤明主をいたむ詞・長広ぬしに贈る詞・南江亭におくる詞・獅子岩に題する詞・呼坂屋と名づくる文・春画に題する詞・枕流亭の記・くゞつの辞・問野集の叙・富士貝の亭にて作する詞・箱根の大御神にさげまつる歌の序・豊耕舎の見立絵に題する詞・木猿にしめす詞・青松亭に贈る詞・福祿寿の賛・そば麦調ずるかたにかける絵に・寒河の社に詣る道にて作れる詞・狸の画賛・うかれ女象の脊にのれる絵に題す・銭屋の翁の慈明忌をとぶらふ辞・戲漫草の序・五節のことば・立川焉馬嘶の会の記・竹の賦・将棊に凝る人をいましむる文・酔竹集の序・美満寿組入の跋・明和狂歌合の序（文化十一年）・四方側狂歌手鑑の序・四角園狂歌帖の序・俳諧歌まるかゞみ序・狂歌百人十首序・たはれ歌よむおほむる・年始物申 どうけ百首の序（寛政五年）。全体の体裁は『平荷文集』とほぼ同一である。（瀧田裕子）

平荷文集 写 (野崎左文自筆) ・大本 1 卷 1 冊

911.19/H91(00010429488)

表紙 渋刷毛引、26.2 × 19.2 糎

外題 題簽「平荷文集 全」 (墨書、左肩無郭)

構成 遊紙 1 丁、扉半丁、口絵半丁 (扉裏)、本文 49 丁 (「平荷文集」46 丁、「研究」3 丁)、遊紙 1 丁

扉題 「平荷文集 全」

内題 「平荷文集」

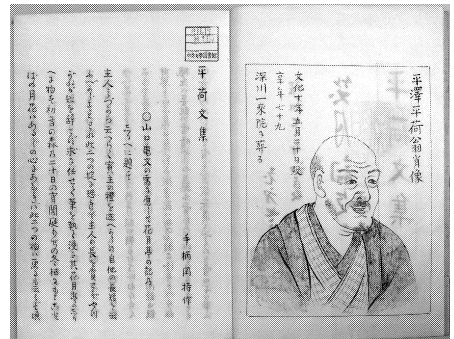
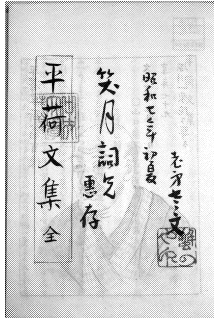
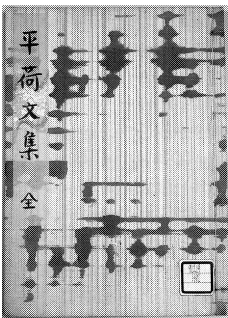
前付 扉裏「平澤平荷翁肖像／文化十年五月二十日歿／享年七十九／深川一乘院に葬る」

本文 無辺無界 10 行、字高 20.5 糎、末に「蟹廼屋筆写 [印] (左文)」

尾題 「平荷文集 尾」

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」 (前遊紙裏、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 糎)

識語 「老弟左文 [印] (蟹のや印) / 昭和七年初夏 / 笑月詞兄 / 惠存」 (扉)



朋誠堂喜三二（手柄岡持、通称平沢平角、後に平荷）の狂文集。野崎左文の自筆本で、彼の編集になる。扉の献辞によって、本書は山本笑月に贈られたものであることがわかる。他に伝本はない。所収狂文・記事は次のとおり。

山口亀文の需子に應じて花月亭の記のしりへに題す・鮑貝に名づくるの説・茶色の弁・羽織の説・銘に曰・狂歌四画二賛の跋・狂歌書画帖の跋・六玉川の記・業平小町の賛・上巳の辞・耳順の説・福助の伝・蚕之茶羅鞍焼場之太刀縁起 寶合之記・尻尾のはへたる花魁道中の画賛・芸者の弁・草画六歌仙の賛 其画を見ざれば賛の意不分といへどもこゝにしるす・鉢叩きの賛・同く鉢叩きの賛・燕斜が別業の壁に題す・明月余情の序 安永六年刊・吉原燈籠に題する狂歌の口上・両吟千句の序・哲阿弥句藻の序・亀を画ける扇に題す・日本堤造道の記・郭公鯉の弁・ぶら挑灯を掲げたる雀の土手の上を飛ぶ画の扇に題す・福祿寿の賛・扇の表に題す・扇の裏に題す・二枚屏風に題す・三平二満の五ッぎぬ着たるが鏡に向ひたる画に・羊羹色の地紙の扇に題す・耳烏齋が画ける乗込の賛・扇面に写得たる細字細見の後序・細見饒の貢の序 天明二年・細見五葉松の序 天明三年・吉原細見の序 天明六年・丙午七年細見の序 同年・丁未秋細見の序 天明七年・戊申秋細見の序 天明八年・吉原細見序 故ありて句読をしるす・長生見度記の序・文武二道万石通の序・改名口上・今春の平吉が新唄のひらきとて百川に会せし後野澤平次が又百川にてつどひ催せし口上・常州土浦の藩醫清水元哲なる人狸の腹鼓の画に元の空網が賛して「月にうかれうつ武蔵野の腹鼓しらべの色もふる狸なり」といふ掛物ありこれによりて予に狂文を求むるによりて・遊女の賛・千蔭大人に贈る書・平沢平格平字尽の系図。巻末に「近世風俗見聞集第三巻に収めたる豊介子日記文化三年のくだりに左の記事あり」「第廿三岡持翁卒去」「吉原細見五葉松序」「吉原細見跋」の研究的項目が加えられている。

（瀧田裕子）

狂歌貝杓子 写（山本笑月自筆稿本）・半紙本 1 卷 1 冊

911.19/Ky4(00012394805)

表紙 白地に茶斜刷毛目格子、22.9 × 15.4 糎

外題 題簽「狂歌貝杓子 一」（写、左肩無郭、16.0 × 3.5 糎）

構成 白紙 4 丁、本文 7 丁、白紙 87 丁

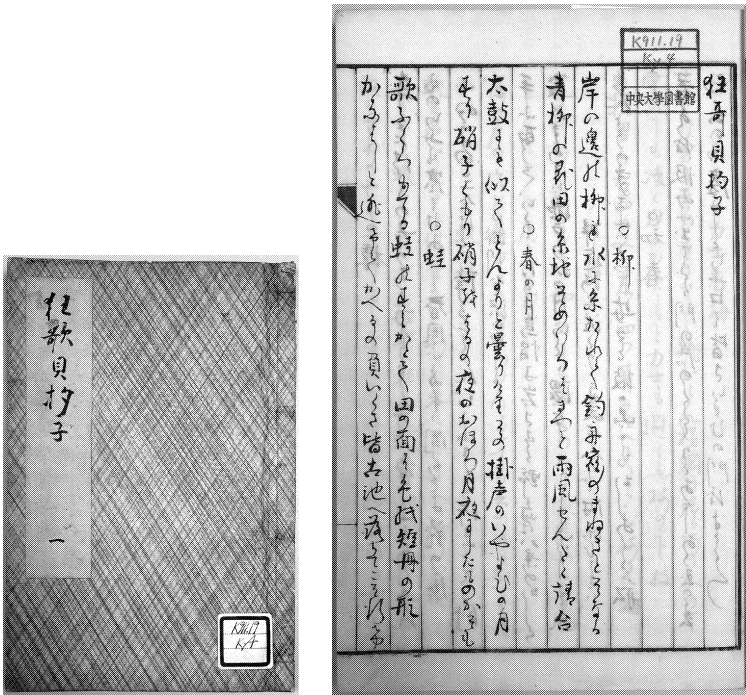
柱刻 白口・単魚尾（料紙である野紙に備わるもの）

見返 前後共退紅色無地料紙

内題 「狂哥貝杓子」

本文 左右双边、匡郭 19.6 × 13.7 種、有界 12 行の青インク木版刷罫紙使用

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和 45 年 4 月 1 日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8 × 4.0 種）



本狂歌稿には筆者に関する記述が見当たらないが、当館架蔵の『^{狂歌}ひとりむし』(次条)と同一の筆跡である。こちらも筆者は明記されていないが、内容から山本笑月の稿本と推定できる。さらに、当館に所蔵されている『日ぐらし雑記』と題する山本笑月の日記の筆跡とも同一であり、両狂歌稿とも山本笑月の筆と断定出来る。また「力士看梅」の題で詠まれた「すまひ男も舌を巻てや眺むらん横綱を張る梅の木

の下」という狂歌は、『^{狂歌}ひとりむし』の中で笑月作として記されており、上記の判断を補強してくれる。因みに、当館所蔵の『日ぐらし日記』は、明治37年の8月と11月のみのものではあるが、笑月と夫人春枝の交換日記という、当時としては珍しい型式のものである。

昭和20年の東京大空襲により中野にあった如是閑邸は焼失し膨大な蔵書、資料が焼失したが、当館所蔵の笑月自筆本3点は当時鎌倉の如是閑別邸にいた笑月夫人が所蔵していたため罹災せず、如是閑没後に如是閑旧蔵書として笑月の養女（如是閑姪）山本幸子氏により中央大学に寄贈されるという経緯を辿っているようである。

さて、この狂歌稿の制作年代であるが、所収93首のうち詠歌の年次を特定できる歌がいくつかある。「金沢紀行」のものが明治31年、蓄犬税を議会で審議する予定であったのは明治34年、大阪内国博覧会が明治36年、日露戦争は明治37年、万世橋の架替え明治38年でほぼ同時期であるが、6代目尾上梅幸の本葬は昭和9年11月でありこの間かなり幅がある。それ以外は折々に作歌したものと思われる。排列は年代順、四季順のどちらにも当らない。ただし筆勢は同じであり、おそらく、長年にわたって書き溜めてきたものをもとに、晩年（昭和初期頃）になって1冊に編んだと思われる。

なお、笑月の筆跡鑑定には、長谷川如是閑研究に著名な山領健二先生のお手を煩わせたことを付記しておく。
(太田澄子)

狂歌 ひとりむし 写（山本笑月自筆稿本）・小本（仮綴）1巻1冊
911.19/H77(00012394797)

表紙 美濃共紙、16.0×12.3 糎、紅白の糸で大和綴

外題 直書「^{狂歌}」（題簽枠外上）、題簽「ひとりむし」（無枠、墨書、6.2×1.5 糎）、直書「老」（題簽枠外下）」

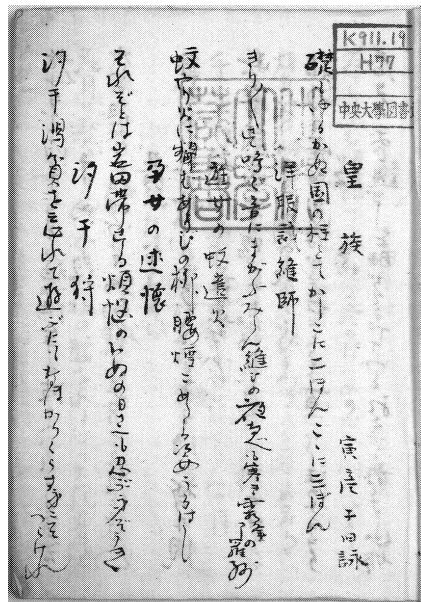
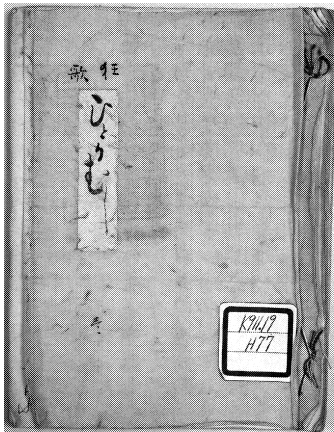
構成 本文24丁墨付き、白紙12丁

本文 無郭無界11行

印記 「長谷川／如是閑／旧蔵／昭和45年4月1日寄贈」（見返、矩形陽刻朱印、5.8×4.0 糎）

備考 紙片（狂歌一首）附録。

題簽には「ひとりむし」の文字が直書きされている。簽外上部に二行割で「狂歌」、下部に「老」とある。「皇族」題の寅彦子旧詠から始まる狂歌が20首（排列の規則は不明）、次いで寅彦と蟹の屋野崎左文との長歌と反歌1組づつ、左文の狂歌1首。撫泉子の狂歌6種と続く。三品蘭溪・寅彦・岡田氏による秋の狂歌応酬46首。小宮山間米子・寅彦・蘭溪の発句3首と狂歌2首。「金沢雨中行」は明治31年2月、柳嶋亭・蘭溪・眠柳・瀬戸氏そして、「われ」との五人で新橋駅を発ち、鎌倉、金沢八景の名所旧跡を廻って横須賀の軍港見物に終る吟行記で、詠まれた狂歌は23首。「われ」とある狂歌4首。寅彦的那須塩原に因なんだ歌8首、雑詠4首。笑月の深川八景8首、春の歌4首。寅彦の歌2首、眠柳宛書簡と狂歌1首。明治32年の紀元節に笑月が記した寅彦・撫泉・笑月の当座吟15首。最後は桐乃屋の狂歌4首、発句1首。添紙に狂歌1首。以上、長歌2首、狂歌149首、発句4句が収められている。文中に「われ」と出てくるのが、筆者笑月であると推定できる。



山本笑月は明治初め頃、木場の材木商、山本徳治郎とタケの長男として生まれた。次男は後のジャーナリスト長谷川如是閑、三男は日本画家の大野静方である。父徳治郎は、材木商を笑月（松之助）に譲ってから、花屋敷、動物園、奥山亭（料亭）、出

版などの事業に次々手を染め、失敗し没落という人生を送っている。兄弟は幼少期には、坪内逍遙の家塾に学ぶなどの自由で恵まれた教育環境で育った。笑月は条野採菊のひきで「やまと新聞」に入社、後に「東京朝日」に移り、大正8年、47歳で社会部長を最後に退職するまでの30余年を新聞記者として過ごした。没年は昭和11年、64歳であった。

この狂歌稿に登場する人物の大部分は、戯作者から転じた新聞小説家である。彼等は概ね、仮名垣魯文の仮名垣派、三世柳亭種彦（高島藍泉）の柳亭派、二世為永春水の為永派の三派に属していたようである。寅彦は右田寅彦、柳嶋亭寅彦の号で知られ、柳亭派の新聞小説家のちに「東京朝日」の記者である。蟹の屋野崎左文は、「仮名読新聞」「万朝報」などの記者を転々とした人間であるが、仮名垣派の戯作者で狂歌をよくした。三品藺溪は柳条亭華彦、明治前期有数の新聞小説家で柳亭派である。眠柳大人は朝日の新聞小説家。岡田氏は岡田霞船か。撫泉子・小宮山間米子・桐乃屋についての詳細はわからない。

全作歌中で右田寅彦の歌は72首と半数近くを占め、笑月の寅彦に対する傾倒ぶりを示す。書名の『^狂歌ひとりむし』も、「どこまでも唯おれひとりおれひとりひとり虫来るともしびを友」という寅彦の狂歌に共感して、それより採ったように思える。「金沢雨中行」の当時、笑月は推定26、7歳、メンバーの中では最年少かと思われる。

本書には「明治座の出し物／大川友右衛門の落首／かきおろしまだ近々の火事芝居／又お荷物をかつぎ出したり」と書かれた紙片が挟み込まれていた。これは明治26年に火災で焼失した明治座が再建開場したことを詠んだものと思われる。筆は笑月である。

【参考文献】山本笑月『明治世相百話』中公文庫版（中央公論社、1983年）、仮名垣魯文『明治初期の新聞小説』（『日本近代文学大系』60巻、角川書店、1973年）、『如是閑文芸選集』月報1-4（岩波書店、1990-1991年）
（太田澄子）

解説 — 近代の狂歌本を中心に —

如是閑旧蔵狂歌本の来歴

本学所蔵の狂歌本のうち、長谷川如是閑旧蔵本の占める割合はきわめて高い。その来歴を明らかにしておこうと思う。

さて、これらの狂歌本はもちろん如是閑が蔵していたものであるが、かといって彼自身が購い求めたものであったかという、どうもそうではなかったようである。先に結論を述べておけば、これらの狂歌本は、もとは如是閑の実兄にあたる笑月山本松之助が蔵していたものだったと思われる。以下に、その理由をのべる。

* * *

如是閑旧蔵の狂歌本のなかの『平荷文集』『真顔文集』は、ともに「蟹廼屋筆写」という識語があるように、蟹廼屋（野崎左文）直筆の写本である。左文独特の字体で記されたもので、「氏は左利きで、左で美しい文字を書いて夥しい古書を現物そのまゝに模写してゐたので有名であつた」とは如是閑の言（『読売新聞』1935〈昭和10〉.6.13）である。さて、『平荷文集』の扉には「老弟左文 [印] / 昭和七年初夏 / 笑月詞兄 / 恵存」、『真顔文集』の扉には「蟹の屋主人 [印] / 笑月大人 / 恵存」なる献辞が記されており、この書の履歴を知りうる。

野崎左文については、近代文学研究叢書第39巻（昭和女子大学近代文化研究室、1974.3）におさめられた「野崎左文」にくわしいが、本書に関連して注目しておきたいのは、左文の属していた狂歌一派が本町側であったということである。如是閑旧蔵狂歌本のなかに、『狂歌みつのとも』（内題は「本町側連入披露狂歌合」、明治33年4月序）と題された返草があり、撰者のひとりとして左文が名をつらねているのだが、この詠草のなかに「山本笑月」の名を見いださう。明治36年3月の年記を有する『狂歌梅月集』の左文序をみれば、

我か知れる東風屋寿香、山の屋笑月ふたりのぬしは生れつき狂才あり、斯うもあらうかの即吟によしや、鬼神感ぜずとも美人を笑ハするほどの力みえて、末頼もしき若うとなれば、おのれ屢々そゝのかして終に本町側に尻をすゑせと、その口入れの受入にたつことゝハなりぬ。

とあり左文と笑月のつきあいの如何がうかがえよう。

さて、左文や笑月が属していた本町側にかんして、山本笑月『明治世相百話』（春陽堂、1936年、p.350）についてみると、次のような記述にいきあたる。

……連中も本町側、小槌側、浅草側、或ひは八雲連、寿連、糸巻連そのほかいろいろ。……なかんづく天明ぶりの本町側が盛んで十七年に『狂歌共楽集』を始め絵入の『月並集』を出版、少し気のある連中はかうなると己れも一つと頭を捻る。

本町側が天明ぶりを標榜していたというのは、たとえば『狂歌みつのとも』桃の屋序文のうち、

……其中興の祖と仰きたる赤良の四方側、橘洲の酔竹側などハ、名をのみ残して今日一人の伝ふる者なく、唯其当時よりして連綿残続なせるハ裏住の本町側のみ。余等其末流にあれハ、微々なからも斯道の新興を計る。

という発言からもうかがえる。そうしてみると、如是閑旧蔵狂歌本のなかの『万載狂歌集』や『後徳和歌万載集』なども、本町側に属していた笑月の蔵書であった可能性は高かろう。ちなみに、これらには「松」をかたどった緑墨印がみられるのだが、上記のことからみると、笑月の本名「松之助」にちなんだものかと思われる。そのほか、秋農屋望成『狂歌春秋』などは左文と関係ないものの、笑月が鶯蛙会にも属していたことを考えれば狂歌会の場においてふたりが見知った仲であったこと、想像するにかたくない。

* * *

如上、如是閑旧蔵の狂歌本が笑月の蔵書であったであろうことを述べてきた。狂歌本のすべてに笑月の蔵書印や「松紋」の緑墨印が押捺されているわけではないが、上記のことにくわえて、如是閑じしん左文との面識がなかったことを考えあわせれば（前掲『読売新聞』）、笑月没後に如是閑の蔵書にくわわったものと考えてよろしかろう。如是閑旧蔵の狂歌本をみていけば、本町側や鶯蛙会といった狂歌連のなかでつちかわれた笑月の人脈が浮かびあがってくるのである。

狂歌の近代

大正から昭和期の狂歌界について、山本笑月「明治狂歌の盛衰記—昔髪しのぶ天明調の復活—」（『明治世相百話』春陽堂、1936.4、p.350-351）が端的にのべているので、以下にかかげてみる。

蜀山以来平民の気を吐いた狂歌も、今は一部の人々によつて辛くも命脈を保つ有様。……初名和歌の門鶴彦、後改めて和歌の屋となつた先代大倉男は人も知る狂歌の先達、江戸時代から斯道で苦勞した本町側の大先輩、その後援もあつて大正五年に出たのが面白会、風雅な雑誌『みなおもしろ』を発行して同十四年まで、十年近く続いたのは狂歌界空前のお手柄、お陰で盛返した狂歌の一派、ちかごろ鶯蛙会の再興、第二の元老蟹の屋、秋の屋、花の屋が踏止まつて昔をしのぶ風流陣。

このように昭和初期における狂歌は「一部の人々によつて辛くも命脈を保つ有様」だったわけで、それゆえ狂歌の普及と見直しは狂歌師必須の課題であった。このあたりの事情については石川了「狂歌雑誌「みなおもしろ」細目」（『芸能文化史』第7号、芸能文化史研究会、1986.9）が、『みなおもしろ』を軸にして大正狂歌界に言及しているので参照されたい。そこで本稿では、時代をくだって昭和初期の狂歌事情について少々ふれてみようかと思う。

* * *

昭和初期、たとえば小柴^{ちい}値一「狂歌の史的考察」（『書齋』第14号、書齋社、1927.5）は、「狂歌を弄ぶものは明治以後にも存したが、結局雑俳の一部とされ、新聞雑誌の六号文芸とされ、文壇歌壇の従属の者となり、隠居閑人の遊技となつてしまつた」という現状を述べ、「今や文壇歌壇より一瞥も与へられぬ運命に墮した」のは、先人の模倣にはしり、いたずらに駄洒落や滑稽を弄した結果であるという見解を提示した。これは江戸文芸を研究する者からの見解であるが、狂歌師のなかにも同様のことを考えていたものがいた。

昭和9年7月26日の年記を有する『狂歌春秋』は、秋農屋望成の手になる現代狂歌批判の書であるが、冒頭を「現代の如く狂歌界の衰頹せるは、一に時世の推移に由れども、一には作者の不熱心に由るのである」という一文でかざつたように、望成は、「狂歌界の衰頹せる」原因をひとえに「作者の不熱心に由る」ものとみていた。たとえば「三五」。これは「十五」をあらわす熟語であるが、「三十五」の意で詠じた歌があるという。あるいは「国語に対する智識が貧弱で」、正しくは「聞かする説教」「愛づる材木屋」とすべきところを「聞かす説教」「愛づ材木屋」としているという。あるいは技巧にはしり、あるいは珍奇に過ぎ、あるいは模倣に終始する。おおくの月次会において判者をしてきた望成からすれば、これらは目にあまる事態であつたのだろう。望成にとって狂歌は、「雑俳」や「言語遊技」でしかない「非文

芸的の似而非狂歌」とは区別されるものであった。「粗笨の頭腦の持主では、文芸的の狂歌は詠まれるものでない」し、「狂歌の作者たるものは、千人の瞽者に賞讃されるよりも、一人の具眼者に賞讃される程の、狂歌をよむ事を心懸く可きである」という。つまり、狂歌が一個の「文芸」として独立することで、「狂歌界」は「衰頹」から復興に転ずると考えていたようである。

このような見解は、すでに明治期から提案されていたもので、たとえば油田秋旻「狂歌とハ何ぞ」（『読売新聞』付録、明治 38.3.5）は、近代の狂歌師たちの指標となった天明狂歌も「今日から之を見ると、文学上の価値を有するものへ至つて少な」く、それはひとえに「之を以て文学の方面に進めやうとする考へが」なかったためであるという。そこで「如何なる滑稽も諷刺も、之を美の範囲内に止め、狂歌の全体をして之を文学的ならしめ、……狂歌の地位を高める」ような「一大改良」が必要であるとした。同日付の同紙朝刊には「狂歌の改良」と題した同社懇話会の談話が掲載されており、文学という価値体系における狂歌の位置づけはずっと議論されてきたのである。

しかしひるがえって、いみじくも小柴が狂歌にたいして「弄ぶ」という語をもちいていたように、あるいは笑月が「花鳥風月のほか、時事問題も詠み込まれ、大いに狂歌の特長を發揮した」（笑月前掲書、p.351）と述べていたように、遊戯性や時事に取材する卑俗性こそ、狂歌が具備する最大の武器ではなかったか。明治期の小新聞や中新聞、雑誌の類に列記されている狂歌などは、そのことを証していよう。望成が憤慨した言葉の意味や活用といった基本はいわずもがな、ある種の質というものも必要となるのだろうが、しかしそれは、決して文学や芸術といった価値観によって裏付けられるものではない。だとすれば、近代の狂歌を研究するためには、文学史と狂歌師それぞれの動向を丹念に追いかける必要がある。そのためにも、基礎ツールの作成は急務であろうし、本書目はそのきっかけにでもなればと考えている。

* * *

ところで、狂歌が「隠居閑人の遊技となってしまうた」と小柴が述べていたように、この時期、狂歌師には老翁が多かった。望成からすれば、そのことも狂歌停滞の因とみえていたようで、「着想も言語も共に陳腐なる上に、活気に乏しいこと、宛然、肺病患者の咳嗽の如く」となかなか手厳しい。けれども、「斯る老耄作者は、……坑にでも埋めなければ、狂歌の進歩向上は期待されぬ」とまで言いきった望成に、はたして若年層の狂歌にたいする認識はみえていたのだろうか。というのも、ここにひとつのアンケートがあるのだが、これをみるかぎり、狂歌の未来は暗い。

〔1〕狂歌とはどんなものですか

答へたもの 八八人

答へぬもの 六四人

代表的の答を次にかゝげます。

- 人の悪口又は滑稽を交ぜた歌
- 諷刺を含む歌
- 人間及世間を諷刺した歌
- 人を笑はせる中に誠をふくむ
- 一種のふざけた歌
- 軽い滑稽のうた
- 人を笑はせるための歌
- 頓知のよい歌
- 和歌に滑稽の調子あるもの
- 馬鹿げた歌のことである
- 狂人のやうな飛んでもない歌
- 俗をはなれた歌
- 奇抜なる歌のこと
- 自分の心に咄嗟に思ひついた事を面白く歌にする
- 面白い掛け言葉のある歌
- 俳句の一種で偶意のもの（又はあてつけ）
- 俳句の変体
- 発句のやうなものでないかしら
- 俳句と同じ語数で面白い事を歌つたもの
- 川柳の振るつたものです
- 狂歌又は狂言とも言ふ
- 酔に乗じて歌ふ流行唄のやうなものです
- 都々逸の如きものをさすならん
- ドドイツ、ハウタ、タテヤマ節等の総称
- よく雑誌などに出てゐるが読んだことがありません

上記のアンケートは、多田義延「中学生と江戸文芸」（『国語と国文学』第1巻第3号、大正13.7）におさめられたもので、成城中学校の四年生152名を対象に実施したもの。多田によれば、中学生の江戸文芸離れの主たる原因は「江戸文芸が偏狭な

る道徳主義、極端に自然の情の流路する事を抑へた禁欲主義の文芸である為」だという。一方の生徒からすれば、勉強は「杜撰な所謂××読本詳解と云ふ様なものに頼つてゐる者が」多く、「研究の範囲は単に字句の解釈位に止り、作者の思想主義作風等に及ぶことは」ないのだという。受験のことも考えればそのための勉強もせねばならず、いつのまにか参考書中心、知識つめこみの勉強にシフトしていく現状があった（桜井逸良「生徒より先生への希望」『国語と国文学』第2巻第6号、大正14.6）。このあたり、現在の学校教育問題を思いおこさせるようで、また教育者と被教育者とのあいだに横たわるひずみがあらわになっており、きわめて興味深い事例なのであるが、ここでは学生の余裕のない環境を指摘するにとどめておく。

* * *

さて、笑月が述べていた「鶯蛙会の再興」は大正6（1917）年正月のことで、葉海坊、笹の家呑次、鬼内居福外に秋農屋望成をくわえた4名からはじまった。昭和9年8月の年記を有する『式拾七番魚果狂歌合』は、野崎左文の喜寿を記念して興行された鶯蛙会の狂歌合をおさめたものであるが、31名の狂歌54首を掲載する。巻末に「此二十七番魚果狂歌合ハ五十部ヲ限り印刷シテ会員ニ頒ツ」とあり、この段階で40名内外の会員がいたのだろう。けれども、月次狂歌会はどうであったかというとおなじ昭和9年8月の年記をもつ「鶯蛙会月次狂歌」の返草（謄写版）をみてみれば、このときの出席人数は秋農屋望成と杜廼屋の両撰者をくわえて11人。記念狂歌合はともかくとして、月次会の営みは細々という語が似つかわしい。

この月次狂歌が行われた翌年の昭和10（1935）年6月8日、笑月のいう「第二の元老」蟹の屋野崎左文が永眠。その笑月も昭和12（1937）年5月10日に逝去。月次狂歌会で撰者・判者をつとめてきた秋農屋望成も、昭和12年刊『^{狂歌}反古袋』以降の活動をしらず、おそらくはそのあたりで没したかと思われる。

かくして、現在の狂歌研究における近代狂歌のあつかいは、「見るべきものは少ない」（宇田敏彦稿「狂歌」、西沢正史・徳田武編『日本古典文学研究史大事典』、勉誠社、1997、p.1029）とされるにいたるのだが、われわれは文学や芸術といったフィルターを取りのぞいたところから狂歌という文化現象を考察しなければならないのではなからうか。

（磯部敦）

翻刻『狂哥貝杓子』・『狂歌ひとりむし』

凡例

- 平仮名は原行通用の字体、漢字は新字とし、踊り字は原文のままとした。
- 濁点、また傍訓・カギ括弧・句読点はすべて原文どおりとした。
- 合字は開いて翻字した。
- 訂正箇所は、訂正後のものを翻字した。
- 行替えは原文のままとした。
- 丁の移りはカギ括弧で示し、その下に「(二才)」のごとく記した。

狂哥貝杓子

狂歌貝杓子 一「(題簽)

(一丁才・ウに記事なし)

狂哥貝杓子

○柳

岸の辺の柳も水に糸たれて釣舟宿のまねきとそなる
青柳の花田の糸地そめいろはきつと雨風せんたく請合

○春の月

太鼓にも似てとんよりと曇りけりその掛声のいやよひの月
すり硝子くもり硝子をはるの夜のおほろ月夜にしたものかそも

○蛙

歌ふくろもてる蛙のすみかとして田の面は色紙短冊の形
かなはしと逃けてかへるの負いくさ皆古池へ落ちてこそ行け」(二才)

○桜

年々にさくらの花のちりつもりよし野を春の山となしてん
ものいふも寒くはあらし春風にたより聞かせよ花の唇
小ぬか雨三合ほとは降るならんむこ山さくら行きて見る時

○武州金沢の里にて

手に取りていたくはかり烏帽子岩さすか野島は八景のかしら
盃のまろきは瀬戸の秋の月いとく限なくさしもこそすれ

帰途海上波たかく舟夫三人ほど附添ひければ

せんとうの多ければにや安々と波の山にもおしあかる船

○初春

若水を汲みに出てたか門の戸のくわらりとあけしあら玉の春
初春の御慶申といふ口は皆さいわひの門をまはりつ(二ウ)

○力士看梅

すまひ男も舌を巻きてや眺むらん横綱を張る梅の木の下
雪をしも凌ぐ力にかなはしと力士も避くる梅の下枝
相撲男か右四つ又は左り四つ蒼かそへてくむ梅見酒

○牛肉

一寸のむしやきにする切身にも五分のたま葱添ふる牛肉

○庚子元旦

窓の戸の穴を通ひてちよろ／＼と子年の春の初日影さす

○蚊遣火

蚊を追へはまた子供等かいたつらに来てさしくへる煙りいふせし
暑さをも蚊をも忘るく極楽は杉葉たきたる門とこそ知れ
蚊のすねのやせ世帯とてふすへ火のけふりも細くたつた一トくべ(三オ)

○蟬

伯龍の子等もその時松原にかゝれる蟬の羽衣や得し

空せみの身をかへてなく諸声はなほ一しほのなつらしきかな

蟬の羽のうす曇る日はいとゝなほすき通りてそひゝく声々

○夏の月

夏の月寝て見る足は伸せともいよゝちゝむと思ふみしか夜

宵越しの銭はもたねと一りんはあしたへ残る夏の夜の月

夏山の腰にさし入る月影を扇子の風にあふきつゝ見る

○蛩

ほたる狩の上手の手より水ぞ漏る萍くるみつかみ損ねて

○団扇

美しくと云へは乙女のわかことゝあからむ顔をかくす絵団扇」(三ウ)

○花下商人

売ものにかさりし花のかんさしもちりかゝるをは厭ふほし店

木の枝にかけつらねたる瓢見世その売声もかしましきかな

○蕨

さほ姫が春の土産か進上ののしといふ字に出つる早蕨

風寒み春とは云へと早わらひの手先ちゝかむ山のふところ

○藤花

行く春の駒引とめよ咲分けの手綱に染むる藤の花房

池の面にうつれる藤のむらさきは緋鯉のあけを奪ひてそ見ゆ

○雲雀

菜の花の咲出てし野のこゝかしこ声も黄色に雲雀なくなり
たん／＼に小さく見ゆる揚ひはり何時しか雲の中になくなる」(四才)

○向島百花園にて

秋の野の花ぬす人もあらんかとその用心に栽うる犬たて

○寒稽古

朝風に向ふ障子の紙よりも吹きゝる声を待つ寒稽古

○菽入

菽入の日を鎌倉に遊びしは小僧の中の大頭かも

○理髪職人の休日

休日に缺持たねと小遣銭をかり込んで行く理髪職人

○閻魔

境内の土も踏まれて人足にこね返へさるゝ蒟蒻えんま

○ペストに斃れし横田医学士を悼む

その職に身は斃れても横田氏の手柄は立ちて世に残るらむ」(四ウ)

○に鼠といふ新漢字をつくりしと聞きて

あを表紙かちる鼠に玉篇の漢字を引いてつけし病名

○冬牡丹

風たにもあてしとすれと冬牡丹はなの頭のやゝあかく見ゆ

○捕鼠懸賞の抽籤

ねすみ鳴きしてよるこはむ引く籤にあたる捕鼠の懸賞の金

○寒梅

さむさにもめけす一重の梅の花皆わた入を重ねぬる時

○水仙花

水仙花しろかね色ははけぬなりめつき／＼と増す寒さかも

○商人の寒垢離

呉服屋のいと丈夫なる信心は数度の水にも堪ふる寒こり」(五才)

○室咲の梅

むろの中うたるはかりに蛸篠の梅の花も真赤にそ見ゆ

○鶯替の神事

木に刻む鶯さへ今日は羽を得て飛ふか如くに売れて行くうめ

○名所の霞

低くとも腰のあたりにかゝるらむ亀の尾山の春かすみとて

○初午

午の日の稲荷祭りや賑はゝんはやしをなせる杉むらの中

○山霞

暦こそ知らね春には漏れし家もなくて一むらかすむ山里

○浦霞

禁断の昔は知らず霞さへ今は阿漕か浦に引く綱」(五ウ)

○雪

暮かたきを呼ひて眺むる景色さへ白勝ちにこそ見ゆれ雪の日

○立春

去年今年相の窟場を春は今朝かすみをとにも引つれて立つ

○早春閑居

鶯も訪ひ来す梅も開かねはふさいてはかり暮らす柴の戸

○紙鳶

飯時は子も下ろさんとたくるにそかしきて見ゆる釜形の風

○早春鶯

調はぬ春の価の足らずめをうめに来てなく千金之鳥

○山鶯

高ねにそなく鶯の山育ち逆もかひつけられぬ籠の中」(六才)

○蒲田の梅

電車にもさきあらそふて乗る人はさかりの梅のかま田行きかも

○春雨

音もせずをり／＼過くる垣の外に花ぬす人のぬるゝ春雨

○春の山

春風のふき出す頃は打解けて笑ひくつるゝ山の雪みち

○川辺梅

春も尚あさき小川の瀬を越えて向ふへわたる岸の梅か香

○社頭梅

神徳と共に仰けはいや高き香とりの宮居ちかくさく梅

○窓前梅

から書の青表紙よりまつ開く日窓にもちかき梅ヶ枝」(六ウ)

○商人観梅

ひをともし宿の梅をも眺めつゝ油を売りて暮らす商人
金物売る商人が見る梅の枝さへ少し錯を持ちけり

○彼岸

贈答のほた餅を見て彼岸には咽喉の仏も先ず喜はむ

○待花

千金はさて措き慾のはる先はたゝ一りんの花もまたれつ

○新万世橋

鼻の先に眼鏡も見えてあたらしくちかめにかけし万世橋

○大坂の内国博覧会

浜荻の伊勢参宮もかねて先づ浪速にあしの向く博覧会

○悼尾上梅幸子

「(七才)

亡き後も其名は陰に響くなりあはれ無常の鐘の音羽屋

○故梅幸の本葬を見て

改めて出す葬式の二番目になほ見物をまねく音羽屋

○上野の桜

しやうぎ隊つめし上野は今もなほ花の王手とさして見に行く

○初松魚

質入れの羽織も親の譲りものかたみに代へて買ふ初鯉

○施し水

江戸ツ子の出す施行とて水道の水にみかきて添へる金椀

○年の市

代物の木口と共に呼声もからして売るや市の桶商

飛ぶやうに売るのは道理景物のはねをも添えて渡す羽子板」(七ウ)

○霜

まだ人の通はぬ先に日のあしの渡りて消ゆる橋の上の霜

○代議士の出京

金銀は選挙に失せてなまりのみ言葉に残る田舎代議士

○横浜の競馬

競走の馬はかりかは外人のかけて争ふ懐中の金

○旧曆の雛の日

赤毛布しきて飾らむ村人の繰る曆さへ旧きひなの日

○畜犬税

けしかける議員もあれば犬の税かみつくやうに取立やせむ

○五月場所の大相撲

汗になる力士と俱に観客もあつくてぞ通ふ夏場所」(八才)

○端艇競漕

水鳥の鴟の浮ぶ川中に漕き合ふ艇のあしも暇なし

○絵団扇

うつくしと云へば乙女の我ことと赤らむ顔をかくす絵団扇

○山桜

雪かとの疑は尚ほやまざくらかんじつゝ見る花の真盛

○萩

そめ物屋多き土地とて花にまで更紗の見ゆる萩寺の萩

○雪の降らざるに

まだ年も新らしければ空にさへふるものはなし雪もあられも

○露兵の掠奪

邦人の荷物掠めし露兵等もやがては己か膽奪はれむ」(八ウ)

狂歌
ひとりむし

狂歌ひとりむし 壹（外題）

皇族

寅彦子旧詠

礎もゆるかぬ国の柱とてかしこに二ほんこゝに三ぼん

洋服裁縫師

きり／＼す鳴く音にまがふみしん縫ひの夜なべも寒き霜降の羅紗

遊女の蚊遣火

蚊やり火に顰むあそびの柳腰煙こめたる姿うるはし

孕女の述懐

それぞとは岩田帯する煩惱のいぬの日さへも忍ぶ身ぞうき

汐干狩

汐干渴貧を忘れて遊ぶにもなおかりくらす身こそつらけれ（一才）
老女まで汐干にまぐる袖ヶ浦年の波さへひくかとぞ見る

十六夜

もちの夜は下戸にゆづりて独酌にいざよふ月の支度こそせめ

節分

豆打のおには外よりそよ／＼とふくをこそ待て梅の下風

みづひきの花盛なるに

此庭の眺めは天の賜ものか露をむすべる水引の花

小手鞠の花

指折りて蕾をよめばひと枝にちよと百ついた庭の小手まり

紅葉

春先に笑ひ過ぎしを恥ぢてにやさつと紅葉を散らす山姫」(一ウ)

時雨

名もちなむ焼蛤のしぐれ空冬のはじめの口を開けたり

煉瓦地の名月

煉瓦地は畑ちがひと疾くいねて衣かつぎたる芋の名月

花に雪にそむきしのみか月にまでつみかさなりて建てる煉瓦家

千金の仲秋なれど煉瓦家の軒では只の一人の月

煉瓦地もたまの命の洗濯と物干棚に月を見るかな

暴風後の名月

大風のふいたる跡はくもりなく鏡のやうに見ゆる名月

名月に歌よまぬ木も折柄の腰をれとなる大風のあと

寄鬼恋

「(二オ)

雨風の夜に通ふとも茨木の手をば切らじな十八の鬼

後悔の臍はかむとも雷の鬼とやならむ恋のならずば

○

九月廿二日と廿三日の両日たま／＼のいとまを得る

ゆえ野崎左文翁と旅行の事を約す目さす

場所は左文翁取定むる筈なれどもいまだ其

沙汰なければ催促の代りに

寅彦

草まくら

旅のお供を

契りおきし

させもが露の

たま／＼の

遊びぞ実いや

命なる

たゝ頼みたる

君なれば

さして行方も

今ごろは

思案のうかぶ」(二ウ)

海のみち

近くて遠き

わたりまで

舟にや乗らん

彼の岸の

中日こめて

ただ二日

いかにせまじと

おぼし召す

見かけし山の

ありもせば

買ひとゝのへむ

わらぢむし

這ひ出る棚を

かいさぐり

脚絆も出さん

つゞら折

けはしき坂の

用心も

ころばぬ先の

杖はしら

すがるの外は

なまよみの

かひ性なしは

目あてなる

先を聞きたく

おもほゑて

御返事のみを

いくへにも

松に取つく

法師せみ

つく／＼をしき

いとまをば」(三オ)

いかでか仇に

ひぐらしの

もろ声聞て

ひとり居の

柴の扉に

寝つゝあるべき

君が足に任するたびの返りごと

こゝの門までふみつけてたべ

全 返し

おん手紙

あさい拝誦

そろばんづくの

わり前も

つかまつり

三円の

手軽き旅を

僅か二円か
するが路や

富士詣でとは

思ひしが

それは費用も

たかねぞと

心づきては

かぶりをも」(三ウ)

ふるてふ圀の

相模なる

大山とこそ

定めつれ

しかはあれども

またの名の

雨降の山々

雨ふらば

閉口なれど

お互ひに

ぬれそぼちたる

蓑むしの

なく音あはれな

姿さへ

時にとりての

一興と

今より覚悟

いたし候

さすれば二十

二日には

朝餉も早く

くみなよと

門をたゝきて

ともなはん

此よしどうぞ

年呉の

大人へ伝へて

くれ竹の

ひとよ泊りの

旅の空

日記かくにも

三人が

文殊ほどには」(四オ)

あらずとも 智恵をしぼりの 染浴衣
そろふてたつも たのしからずや

○ 約束を神にもかたくちかひけり名におほ山の石尊詣で

八月三十日朝

蟹の屋拝

柳塙亭大人

○ 柳

撫泉子

佐保姫も春のにしきや織らんとて糸よりかくる青柳の枝

○

おなじ人

鶯の来れば開くる梅暦月日もよろし星もまたよし」(四ウ)

○

おなじ人

下草も着て出る雪のわた帽子見れば嫁菜もとりたくぞある

床上祝の鳥子餅

鳥の子の餅をくばりて今日よりはとやを出でたる心地こそすれ

梅やしきの喧

魁の花の兄イがいさかひにめをつくもありはな打つもあり

雑煮餅にもたれしといふ人に

軽々ととりし雑煮の太箸になど気ばかりは重くもたれし

○

詞友三品藺溪氏かねて見知れる人々のものさ

れし狂哥どもいとねもころにしるしたまひ」(五才)

『まなひの余韻』と題して秘め取めたまひけ

るを強いて借りもて写し侍るに佳什数ふる

に違あらず益する所少なからねば序して

氏の賜ものを謝するになむ

○右田寅彦子と岡田氏方に会しける折

右 ふところの淋しき秋は見るもうし金が敵のかたわれの月

” 添竹の杖突きの腰の婆々ならめのゝ字にくねる萩の花妻

右 赤白の萩いつれかよろしきやとの話しの末

白からぬはぎなればこそめでたけれ見惚れて椽をふみもはずさず

三 もちよの夜はの哥の返し(前に出せり)

三 いぎよひし跡はたちまち寝まち也もちには何もおもひつきなし(五ウ)

三 また前の「金か敵」の返し

三 その敵尋ぬる内にあきがきてもちにつきよの身こそうさ

岡 萩の野 天明調

岡 錦織る千草の花のほころびてところ／＼にはぎもありけり

右 更に之を修正して

右 八千くさのほころぶのべをつくろふてところ／＼にはぎもあるなり

世事皆非也 色に濁るとの外

眼に映ずるもなし

右 夜をふかすいものためには何事も皆わら灰の煙りなりけり

予（卷中予と記せるは何れも三品氏の事）中

座して帰る寅彦子よりおこせし歌

「（六才）

右

あちこちに引手の多きかつら子のむかしにかへる耳なしの池
吹く風に打ちなひきたる青柳の條はそのまゝかへりこそすれ

直ちに返し

三

耳なしの池に照り添ふをかの月何は扱おきいざ行きて見ん

” 青柳の只だ一ト條に思ふなる枝は君をし招きこそすれ

再び訪ひゆく雅談湧くがごとし延ひて

禅道の事に到る

氷川にむれる鳥はむく鳥なり

芸者なんぞにはなはくれなる

右

どこまでも唯おれひとりおれひとりひとり虫来るともしびを友」（六ウ）

待つ人ありて

右

来ぬ人のおそきは常の十八番急かずに待てよ暫らく／＼／＼

○

芋製の珍菓を寅彦子よりおくらる予

これを風味して

寄芋恋

三 うすくとも長くちぎらむいもか身はかみしめてこそ味はいづめり

後の月にまだ日数ある頃

氷川の森影にくつと狂歌師がりて

月はまだ十三夜には程遠き七ツ子なればもりは離れず

折から月さしのほりぬ
一（七才）

蒲鉾のかたち似たる月かげは森の梢のはにかゝりけり

雑

御馳走の豆腐に耳のあるも憂し聞えませぬは大人と天道

庭竹も主人の用に立てんとかしきりにつくるたかんなの筆

日月燈 江海油 風雷鼓板

天地間一大戲場

堯舜旦 瑞武朱 莽操淨旦

古今来許多脚色

右 世の中のいきた芝居を山の手のたかみより見るつんぼう棧敷

豆腐につきて

三 天道は是歟非歟人にきくらげの耳より頼むおかべ八目」(七ウ)

月

三 大根の袈裟切と見し今日の月みそひともじの種なりとする

これより題あり 紅葉、時雨、鹿

岡 緋ぢりめんの燃立つやうな初紅葉高尾の裾にほの見えにけり

三 山々に想ひそめてし櫛もみぢ濃ぞ頼まんしかと契れば

三 秋風に吹かれて腹を立田なる紅葉は姫の赤き心根

右 鳴く声を夜毎にしかと聞馴れて悲しい気にはならぬ市人

三 はる／＼と旅にきぬたの夜もすがらうつゝの秋をふる里の夢

○

瀧前の落葉

右 夏はみどり秋はもみぢの散りそめて赤く染めたる瀧の白糸（八才）

右 うま酒の三わのいがきのむら時雨徳利のやうに又もふるなり

右は社頭の時雨といへる題にて

○雑

右 さえ渡る弓張月をすかし見れば百歩の外に柳散るなり

三 光陰は矢よりも早くたつか弓また満月と引絞りつゝ

料理に菊を愛すること淵明はものかは

右 飲む時は菊をさしみのつまに採て五斗兵衛にさへ腰をかぐめず

酒は飲むべし

” 先ず礼に始まる酒の爛徳利袴を穿て出るぞをかしき

酒は飲むべからず

” 四君子のらんに終りを見するかな酔ふては耻も知らぬ席書（八ウ）

あれも人の子とは雪の日のみかは

憫れむべきは酒屋の御用なり

〃
飲む人は浮いて見えたる水鳥も足にひまなき樽拾ひかな

○

酒のため討死をする宴会は諸所にて猪口をさしちがへけり
通帳片手にさげて行くものは昼夜をすてぬ米の水かな

昨夜仕事のひまにとありて

花はたゞ雲かと思えて木の知れぬ麻布の里の春ぞ恋しき
頬杖をひとり筑摩の鍋町にかさねてぞ居る座蒲団のつま

柳橋及び鶴見に出火ありし夜

若草のつまやもゆらむ柳橋火事の煙もこむる春とて

「(九才)

右
ひと時も首をのばせは千年ふる鶴見の火事の知らせをばまつ

楽天の誥ありて後

〃
いて我もひとつ心になりひさごひさしかるべき世を安くせん

是より出社すとて

〃
是よりは又もにかいの夜稼ぎに盗句かゝん泥棒の種

案山子の贊ぎに無理なる事をかくも

我田へ水を引くにこそ

右
僧都とはいはれながらも竹の弓よつびいてある熊谷堤

修禪寺行の際狩野川を渡るとて

右
狩野といふ流れをたどるとら彦が何とて竹の杖をつきけむ

美女のかたに

「(九ウ)

顔は花指は白魚肌は雪身持もいづれ人でなしめ敷

○

小宮山間米子古き扇子へ戯れに

涼しさやひとりである夜夏の月

と記されしを寅彦子見て

世はなんの二人で或夜なつの月

藺溪子も

欄干にぼんやりある夜夏の月

以上三句此集中のものにあらねど酔中三君の心事

をかしき節あれば写し置く

○

「(十才)

春雨

休みなく降る春の夜の雨の足明日ともならばはれ上るらむ

春雨のふり出したるぞ葉なるかぜは名残も風てしまへば

○

金沢雨中行

明治卅一戌歳卯花月三日といふ大祭日を期して社友

柳塙亭初め藺溪老眠柳兄瀬戸氏及びわれ一行

五名武州金沢を志さして一日の旅を試るむ此日朝

より春雨しとくに降り出で、天文通の柳塙亭も七を投

げたれど一行更に騒がずして新橋より汽車に乗り品川

にて約の如く眠柳子と会す雨ます／＼烈しく汽車の「(十ウ)

鎌倉に着せし頃は殆んど面を向くべくもあらず停

車場を出で、只走りに走り漸く荒物売る店に辿りつき

てわれは大黒傘を求む寅彦子も糸立二枚を購ふ此

日横浜貿易商組合夏の運動会ありて同時に落合ひ

全じく雨具求むるもの多く既に大方は売尽し柳塙亭

が辛うじて手に入れし糸立二枚とも鼠の齒の痕夥

しく常ならば鶏の埒にも敷きてんとかいやり捨つべきを

今日ばかりは得意げに被りてそが一枚を藺溪老に

着せたるこそ旅は憂きものと思ひ^{あた}当られて涙さしぐ

まるゝ業なれ去る程に星月夜とはそら頼めなる雨を

衝いて鎌倉名所の随一たる鶴ヶ岡八幡宮に詣つ」(十一才)

数十階の段かつら苔蒸して神寂びたるいとをかし

社前に額づきて筆。運長久を祈り白旗宮をも一

拝して寅彦子が待ちたる茶亭に帰る子は鎌倉

通として同人間に少しく知られたる先輩なれば

快日はグツと落着き払ひ初めての者は緩りと

見て来たまへと云へり我等もけむたき梶原の居

らぬがよしと皆急ぎ詣でたる跡にて子曰く

筆字改文。

山本氏等の鶴ヶ岡参拝を茶店に待ちて

君が脛の長しといへど鶴ヶ岡見惚れてたてば連ぞうれふる

雨甚だし朝比奈峠に向ふ路を岐に取りて半里斗り

大塔宮を祀れる鎌倉宮に詣で逆賊足利某の為」(十一ウ)

めに幽せられたまひし土窟を拝覽す入口方一間に過ぎ

ず奥は右の方へ広く十一疊程と申せど勿論上下四

面岩石のみ深一丈三四尺口狭ければ日の光りも及ば

ず湿気しと／＼と肌に迫る一行拝し了りて只涙

を催ほし奉るのみ洒落気全く失せたるは遠がに南

朝の遺臣打揃へばなり柳塙亭つゝしみて

鎌倉といへば搔いてぞ切りにける竹の園生のこの君の首

御窟より右の方三十間斗り小高き丘の上に宮の御首

級を打捨てまいらせし所あり淵辺伊賀と云へるが御しる

しを掲げながら余りの恐ろしさに都へは得持ち行

かれで斯く捨てゝぞ行きけると伝ふ
「(十二オ)

途を転じて朝比奈峠に向ふ風と雨とます／＼一行を

苦しめけるが山は遠がに春なれば若葉の緑染め

出だしてかゝる折にも長閑なり寅彦子は先の程より

わが大黒傘を物の用に立てんと打案じつる様あり
りしが果して

春の雨山もにこ／＼笑ふなり大黒傘をさして行く手に

と例の如く吐く心憎しまた

坂道もおめずおくせず金沢の里へつん出る朝比奈峠

曾我にあらざも皆兄弟分の仲とて対面の当込み

大受けなり、道は次第に仰ぎ谷は漸く迫

りて奇景応接に違なしとや云はん
「(十二ウ)

険しき坂を上りて十余丁こゝ頂上の茶亭に憩ふ折焼く

柴に暖まりて寒さ少しく退ぞきたるに早や好きな熱を

吹きて喧まし是よりは下り全じく十余丁の峻坂なり

道ぬかりて足許危うげなりしが終に転けたるものあり

名は云はず更に行き／＼て六浦の庄に達す過ぐれ

ば忽ち金沢にて九覽亭は里の入口なる金龍院の

後への岡に立てり八景と能見堂とを併せ見るとて此

名あるよし亭の外面に立てば雨風烈しく面を撲

つをヂツと堪えて打眺むれば左手に近く瀬戸洲ノ崎

其後方に小泉の山、称名寺の家根は森にほの見ゆ其

下は松原つゞきの海に沿ひて長く白沙の隠現する状「(十三才)

天の橋立、三保の松原もかくやと思はるゝ是れ乙鞆

なり乙鞆の端突出でたる一村は野崎にて之と相對

ひ入江を隔てゝ右に内川の里は山を背にして連

れり烏帽子岩夏島など雨に包まれて朧ろげなるも
をかし藺溪老興に乗じて

八景を九覽亭にとほ見しつ千万無量うれしかりける

見了りて亭を下れば飛石と云ふ大きな石あり蔦

かつらに覆はれ苔蒸して注連くゝしあり昔三

島明神の幣飛び来りて此上に止まりしといふ

箱庭と人もいふなる八景をながむる寺に飛石もあり

こは柳子の即詠、さて先に見たる瀬戸洲ノ崎」(十三ウ)

を過ぎ塩田の傍なる堤を経て野島に着し野

島館と云ふ料亭に入る濡れそぼちたる脚半草鞋

を脱ぎて座敷に落着きし時の心地得も云はれざり

し風呂焚かせて湯に入りし時はまた更に。

家居なほ新しう海に臨みて座敷の造りざまいと

をかし烏帽子岩夏嶋など眼前に並び遠く房総

の山々を見て左りの方水や空なる大海原の波あらく

かくれ岩などほの見ゆるも夏島を界に入江と

なりて海は鏡にぞ似たりけるわれこゝに至りて斯なん

手に取りていたゞく斗り烏帽子岩さすが野島は八景のかしら

柳塙亭も

「(十四才)

晴るゝかと疑ひのかを瑕にしても五百両なる雨の夏しま

鮮らしき魚を肴に酒を呼びてやゝ元氣づきたれば途中の失策など語り出で魚は身を突付きながら

話は人のあらをほじりて互みに罵り合ふ持つたが

病ひなりけり此仙境に二月三月がほど居たらんには

全快すべくや覺束なし柳子独り笑つて天下皆酔

へりわれ独り醒めたり

女文字のかな沢の里けふこえて草臥れながらゑひもせぬ酒

旅衣きつね酒の注ぎても〳〵限りなきに似たり

雨小休みなく降り続く人々此家に一夜明かさんと云

ふを眠柳瀬戸両子のみ去り難き事をもてれば」(十四ウ)

今宵は是非歸りてん暮れぬ中にとてそこ〳〵に出づ

わびしけれど止めんやうもなければわれ

きたなくも泥に塗れし姿にてうしろ見せつゝ帰る人影

残れるは柳、藺、われの三人皆いとうをとなしき男

なれば重盛知盛の卿などに離れたらん平家の

公達かと思はれて館の女即ち館女ども哀れ心

細くや顔を背向けて涙を拭ふ後にて聞けば欠伸

の出でしにと

酔いしれて今は徳利と共に倒れながらも明日のてけ

心にかゝりて柳子藺子眠りもやらず顔は重箱に似

たれど眼は皿の如し程なく柳子呻き出でたるは若し」(十五才)

旅馴れぬ身の疝癩にてもと人々氣遣ふを制し

て左の八景の狂哥をなん示さる

平瀉の落雁

平瀉に琴柱のやうな雁のつら十三峠越えてこそ来れ

称名寺の晩鐘

入相の鐘は六字の称名寺夕日も西の方へこそ行け

乙鞆の帰帆

乙鞆に汐焼く煙り灸に似てあしさへいとゞ軽き入船

野嶋の夕照

白浪は寄れど野島の夕日影照らせば流石盗句も出ず

小泉の夜雨

一刷毛に書きたる絵にぞ似たりけるうす墨の山こいづみの雨

洲崎の晴嵐

風軽くふきぬく海の鏡かと見ゆる洲崎ぞ天下一なる

内川の暮雪

外かはその眺めは迎も及ばじな雪積む山の内かはその暮

瀬戸の秋月

隈もなき名月の夜の芋と瀬戸離れがたなき仲秋ぞよき

古人も思ひ到らざる取なしいと手際よく景色と

「(十五才)

共に此歌も飽かず眺めらるゝぞかしわれ羨やまし
さの余り直にも八景を三ツづゝ詠みて驚ろかさんと

思ひしも案じつかず只一ツにて已む其歌「(十六才)

さかづきの円きは瀬戸の秋の月いとゞ隈なくさしもこそすれ

拙なき歌も柳子は上戸われは下戸なれば位違

へる是非なし、斯くて雨風の波の音に和して凄

ましきまで響き渡れば明日の船出に横須賀ま

での海上いかゞあらん今宵已みてほしと人々気を

揉む雨乞ひの歌は昔もあなれど晴を祈れるは

見えずいざ晴乞ひせんと柳子寢床の裡に謹み

畏こみて詠める

降過ぎて憂しと三島の神の罰に雨の足こそはれあがるらめ

雨の足はいかゞあるべき我足は昼の疲れに確かに

はれたりと擦りながらわれ云ふ柳子口惜しが「(十六ウ)

りて君の足ならば嘸ぞなが雨にてありつらん能くも

はれたりといふ返詞なりいと睡たかりしかば。

夜明けぬれば海の面波立ちたれど雨は正しく休み

て日かげ薄うしま山を照らす柳子いたく誇りて晴

乞ひの歌の徳を自から褒めたゝえ仕たり顔に空

を見廻はすを三遍煙草ふかして鼻蠢めかす

其煙り沖を走れる蒸汽船のと対なり

藺溪子こそ羨やまるれ歌の徳は聞かされもせ

で浜辺の干潟に下り立ち貝をあさり蛤など拾ひつゝ

歩ひゆくかひもありその朝ぼらけみるめ多かるけしきなりけり

と書いつけて出す字は美事に走り書なれども」(十七才)

貝の事なればひろひ読みにこそ読まめ

斯くて横須賀行の船促がし立つれば常は船人一人

にてすなる船路も今日し風荒く波立てれるに

楫取とも三人つく雨は晴乞の歌に休みたり

若しやみ乞の歌をも詠みたらんには風も疾く

已むべかりしをと人々啣ちぬ、はれ乞と云ひやみ

乞と云ふ皆くすしの手際めきたれど例の葉だ

にあらば空模様脈を引かでも心強くありなんと

て酒用意して船に乗る快よさ口にも得云へず

況んや筆にをや鏡の如き入江を乗り出でゝ

烏帽子岩の外はさすがに波高く凡そ四五尺」(十七才)

せんどうの多ければにや安々と波の山にも押しあぐる船

われ斯く云ひて青くなれる人々を慰さむ置

の如き海ならましかば机に倚りて船漕ぎ馴れし身の聊か驚ろく所なけれど大海原の面も波荒け

れば胸噪ぎのしつるも宜なり藺溪子声張り揚
げて得意の唐うた唄ふ雲か山かと見ゆる波
にも恐れずとの勢ひを見するならんが其声の顫
へたるは船の揺るゝが為めなるへし

あら川の掘割を過ぎて横須賀に着きしは僅か
半時に足らず帆を揚げて走り来りし故と船
人は誇れり港内には軍艦濟遠、須磨、松島、^一(十八才)
など七八艘碇を下ろせる中に例の富士艦あり
柳塙亭膽を潰して

見事さに夢と思ふも目出たきは三国一の富士艦にこそ
かくいひて船より上り人の隧道を潜りて停車
場に入り十時過ぐる頃汽車に乗込みて都
の棲家へ戻りぬ此間革ぶくろを肩にせし柳
子藺子とも疲れにたれば家路をのみ急ぎてか
へるの歌袋は手をもつけず駄洒落のみ井出の山
吹こゝには云はぬいろ／＼の事 (完)

雨中行拾遺

鶴ヶ岡にてわれ

一 (十八ウ)

つれは皆群れて詣でし鶴ヶ岡首をのばして一人待ちけり
と柳塙亭が独り茶亭にありて待てるを氣遣

ひて詠む柳子はさまで待たずと云ひつゝ
見物も早いが勝と踵をやひるがへしけん白旗の宮

われまた鎌倉の宮を拝して

宮柱太しき立てゝ鎌くらに祀れる親王は国の礎

柳塙亭は頼朝屋敷跡を過ぎつゝ

頼朝の屋敷跡とて弓矢とる案山子の形も頭でつかち

○

塩原の若葉

皐月の九日十日の両日を以て柳塙亭大人と（十九才）

われ野州塩原に二日の清遊を試るむ

みちの記は載せて朝日の紙上にあれば省

きつこゝには旅中のざれ歌をのみかいつく

那須原を過ぎて

寅彦子

我はまた疲れて辿る大汗の霰たばしる那須の篠原

関谷の里

行春の無切手なれば通り兼ねて関谷は今も花の真盛り

箒川

水清き流れの音に世の中の塵はとゞめぬ箒川かな

児ヶ淵

法師ならぬ身も木の端の葉越しより見惚れて立ちし児ヶ淵かな（十九才）

洞門

山姫も化粧によりて若葉時洞門の穴のあくまでぞ見る

天狗岩

天狗てふ岩の鼻さへ高ければ自慢とぞ見る塩原名所

舩屋に宿りて

草臥れし旅の愁いを掃ひけり箒河原の宿の晩酌

高尾塚に例の晴乞

天気さへ明日まで待てよ高尾塚ふらぬ遊びの古跡なりせば

○

柳塙亭雜詠

卯木垣深雪と見しに引替へて今はあはれに朝兒の咲く（二十才）
手廻らぬかせきの角の細工場に妻も呼ふなり奈良の市人
餌をねだる奈良の男鹿はほら／＼と行かふ人の棲や恋ふらん

秋日御殿場を過ぎて

紅葉する峰のこし元錦着て山姫君を守る御殿場

○

戯れに深川八景をよめる

笑月

冬木弁天の落雁

美しくしき姿に雁も見とれけんつらを乱して落つる池の面

富ヶ岡の夕照

弓矢神みます宮居に夕ばえのあかねさしぬく玉垣も見ゆ

砂村の晴嵐

「(二十ウ)

遠しともせんき稻荷へ詣でなむはれてぞ見ゆる砂むらの里

佃の暮雪

汐風にさらせし肌も化粧して人目につくだ雪の夕ぐれ

永代橋の秋月

くろかねの橋も隈なく照りそふてしろかね色に見ゆる月影

洲崎の夜雨

傾城のつれなくもまたこぬか雨ふりとほされて帰る身ぞうき

越中島の帰帆

越中のふとしに似たる帆かけ船島の向ふを外れてぞ行く

霊岸島の晚鐘

聞いてみつ数へてみつの六ツ引けば暮六ツだけは○がんの鐘「(二十一オ)

○

年内立春

今年とも去年ともつかぬ一年のあひの宿場を春は立ちけり

元旦

初春の御慶申といふ口はみな福の門をまわりつ

惜春

まだ見たきものもありしを春がすみ／＼とて春がすみけり

一年の先に立つたる春霞あとよりつゞけ梅もさくらも

○

金沢は野島に遊びける時酒飲めども

まはされす此図をうつす程の勇氣ありければ」(二十一ウ)
女文字のかな沢の里けふこえてくたひれなから多ひもせぬ酒

此歌は寅彦ぬしの狂詠にて前に出だせるも自画
に添えてたまはりければ更に記し置きつ

○

明治三十年五月といふに煉瓦より麻布の茅

屋に引移りて

寅彦

瓦屋の完きよりもやれ庇砕くるぞよき梅雨の玉水

○

御たまものゝ山吹あまりに嬉しくてさらに花

桶相求め例のつかみざしにて且暮たのしみ

候ところ今夕獨酌の折花一ツ咲出候を見れ」(二十二オ)

ば一重にこそ候らへ山吹は実のなきものと言伝

へ候へども一重はしからすと承り候にさへ思ひ

寄らるゝふしありて又してもひなふりうめ

き出申候御一笑／＼

山吹を手折りておくる心根のたゞひとへには花も実もあり

酔中の狂詠たゞ怪しうこそ穴賢

十五日夕

寅彦拝

眠柳詞兄

○

明らけく治まる三十あまり二年如月十一日の紀

元節、詞兄寅彦、撫泉の両大人辰巳の「(二十二ウ)

里なるおのれの許訪ひたまひし折力士の看

梅と云へる即題にて詠める歌どもおのれのを

しも交へてかいつけ置きぬ

笑月

当座題詠

寅彦大人

下館梅見の宴に侍る身は幕の内なるおかゝへずまふ

咲く梅も山の畑の三段目ふさはしと見る田舎すまひ男

すまひ男のうかれて道を踏切ればかつ色見する園の梅哉

すまひ男の梅見に來れば立上りあるじも外づす門の門

かつ色の梅を見るなり阿屋の四本ばしらに相撲年寄

撫泉大人

勝つ色に誇りて高き梅のはなへし折りたくも思ふすまひ男「(二十三才)

本場所の本所に近くすまひ取梅には足も踏出して見る

軒先に突出す梅を勝まけの星とまがひて見る角力取

大名の鎗梅見とてお抱への力士もきたり加賀紋羽織

富貴自在天神のうめにすまひ男の貧乏神は恐れてぞ見る

笑月

すまひ男も舌を巻きてや眺むらん横綱も張る梅の木の下

雪をしも凌ぐ力に敵はしと力士も避くる梅の下枝

すまひ男が右四つ又は左り四つ荅かぞへてくむ梅見酒

たち上り覗く隣りの梅か香に出鼻つかれて怯む相撲男

本場所の眺めはあかす勝力士はなを投げたる梅の下風

○

雪

桐乃屋

崑山アモトの下玉を以て鳥を抵つツの贅沢はなくとも

竹帚木を以て玉の塵を掃く町中の雪げしき

障子を開けて一杯を傾むくれば何ものゝ樂

しみかこれに如かん

大名の鎗梅の咲く庭の面にふれるは雪の白鳥毛かも

朝アサの眺めはまた格別わか家を出でゝ登

り見れば是はくクとばかり雪の上野山

枯木にも花のさくらか岡の辺に散るを惜しみてくむ雪見酒

廓の方を望みて

解け易き泥水の名に似もやらでふりにふつたる春の雪女郎」(二十四才)

「(二十三ウ)

帰るさに雪だるまを見て句

其顔の何に解け行く雪だるま

○

聞虫

しゝまなる鉦たゝき虫なくからに人も暫しは物いはて聞く」(二十四ウ)

(添紙)

明治座の出し物

大川友右衛門の落首

かきおろしまだ近々の火事芝居

又お荷物をかつぎ出したり

後記

本書は、中央大学所蔵狂歌関係書の解題書目である。書誌および解題は、本学大学院生（文学研究科国文学専攻）の浅埜晴子・磯部敦・五嶋靖弘・瀧田裕子・梁喜辰・吉川東、本学図書館勤務の太田澄子・金津有紀子・斉藤理香、および鈴木俊幸が担当した。

本学所蔵の該資料群の特徴は、長谷川如是閑旧蔵本が多いこと、そしてそれと大いに関係することであるが、近代以降の狂歌本の多いことにある。このことについては磯部敦の文章を解説替わりに目録末に据えた。

また、山本笑月自筆稿本『狂哥貝杓子』『^{狂歌}ひとりむし』については、明治期狂歌壇の様相と文人連の狂歌を介した遊びとを生き生きと具体的に物語る好個の資料として貴重であると判断し、本目録附録として翻刻を収めた。翻字は太田澄子が担当した。

(2005年3月吉日 鈴木記)

中央大学所蔵狂歌関係書解題目録

2005年3月31日発行

編輯
発行 中央大学図書館

〒192-0393 八王子市東中野742-1

TEL. 0426-74-2551

FAX. 0426-74-2547

印刷 株式会社ワコー